

## セイント・ジョン・アーヴィンの演劇研究(2) —— 中期8作品・後期7作品を中心に ——

河野賢司

### (I) はじめに

セイント・ジョン・アーヴィンの初期6作品を論じた前稿(紀要第21号)をうけて、ここでは中期8作品・後期7作品の合計21編を取り上げ、アーヴィンの演劇作品のほぼ全容を紹介したい。

### (II) 中期作品の梗概と論評

中期とは、やや趣を異にする悲劇2編(1922年)を別にすれば、1920年代半ば以降の主としてロンドンはウェス・エンドやリヴァプールでの喜劇時代を指す。この時期に書かれた作品は以下のように、一幕物3編とフル・レンクス5編である。

#### 中期作品

『船』(*The Ship*, 1922年刊行, 初演不詳)

『進歩』(*Progress*, 1922年4月3日初演)

『ベルモントのレイディ』(*The Lady of Belmont*, 1923年刊行, 初演不詳)

『メアリー, メアリー, すこぶるつむじ曲がり』(*Mary, Mary, Quite Contrary*,  
1923年刊行, 初演不詳)

『アンソニーとアナ』(*Anthony and Anna*, 1926年3月9日初演, 改版は1935年  
11月8日初演)

『ジョージ爺さんがお茶に来る』(*Ole George Comes to Tea*, 1927年5月27日初演)

『彼女はまったく淑女でなかった』(*She Was No Lady*, 1927年9月27日初演)

『最初のフレイザー夫人』(*The First Mrs. Fraser*, 1929年7月2日初演)

#### ① 『船』(*The Ship*) 1922 3幕(全5場)

初演不詳。アーヴィンの『戯曲作法』によれば、「英国及びアメリカの研究劇団で幾百回となく上演され(中略)放送もされて成功している経歴もあるのだが、如何なる商業劇場のマネージャに話して<sup>(ママ)</sup>みても倫敦紐育ともにその上演を見た事がない。彼等

は「一般的」でない事を懸念<sup>1)</sup>したらしく、北アイルランドという設定の特殊性・個別性が災いしているかも知れない。献辞はフローレンス・ラモント (Florence Lamont) に、謝辞は造船に詳しいシムネット少佐 (Major W.A. Simnett) に捧げられている。

第1幕。北アイルランドの架空の造船町ビッグポート (Biggport) 近郊にある、62歳の造船所経営者ジョン・サーロウ (John Thurlow) の田舎家の部屋。ある穏やかな秋の土曜日の午後。83歳ながら豊饒たるジョンの母親 (Old Mrs. Thurlow) が暖炉の傍らに座り、42歳の妻ジャネット (Janet) はお茶の準備。19歳の娘ヘスター (Hester) が庭から登場。3人で21歳の息子ジャック (Jack) の噂をしていると、そのジャックが帰宅。彼は3週間のフランス旅行で、人生や神の意味、自己の進路について思索を巡らせてきた。第1次大戦の激戦地、ソム渓谷やバポーム (Bapaume) を訪ねて、若い従軍兵士たちが嘗めた辛酸と絶望を追体験し、社会改革はまず自己改革から、隗より始めよ、でなければならない、と語る。豊かな自然の恵みの大切さをフランス農民たちの仕事ぶりを見て実感し、現代機会文明はその自然を産業廃棄物で汚染し、人間を機械労働の奴隷にしている、と説く。銃が勝手に暴発しないのと同様に、問題は機械でなく人間の姿勢であり、農機具の鋤も機械だ、と祖母は反論するが、ジャックは、大型船は海洋汚染源であり、父親の造船所での仕事を辞める決心だと告げる。母ジャネットは、中世の都市の方が天然痘などの疫病で不衛生だった、と反論するが、中世には偉大な詩と詩人があった、とジャック。フランスで知り合ったコーネーリアス元大尉 (Captain Cornelius) という29歳の青年と共同で農業経営を開始し、その資金提供を父親に依頼する計画で、これまでは父親の意見をそのまま受け入れる共鳴版 (sounding board) だったが、今後は自分自身の意思を主張したい、と訴える。祖母は、ジョンも船舶への情熱を持つ理想主義者であり、不撓不屈の精神で困難に耐えた誇るべき父親だと論ずるが、ジャックは父親の信念そのものに不信をぶちまける。そこへジョンと造船所従業員で24歳のジョージ (Mr. George Norwood) の帰宅をメイドのマギー (Maggie) が告げ、まずジョンが登場、ジョージが抱えている『荘厳号』 ("Magnificent") を運び入れる手伝いをするようにジャックに声をかける。(月曜には女王陛下がこの新造船の進水式のために訪問予定で、ジョンは爵位を得るかも知れない、という期待でジャネットはわくわくしている。) やがて二人は1.2mもあるガラス・ケースに収められた模型船を搬入し、テーブルに置く。昔の石炭燃焼用の煙突 (funnels) の代わりに石油燃焼用の換気用導管、帆柱の代わりに通信用の格子細工柱が装備されているこの船をジョンは美しいと喧伝するが、妻は醜いと評する。しかし、無駄な空間を廃した機能的デザイン、旋回が容易で停泊に邪魔にならぬ規模ながら、乗客3千人の収容能力、英米間 (サウサンプトン～ニュー・ヨーク間) を4日間、時速24ノット (=44キロ) で高速航行し、キュナード汽船<sup>2)</sup> (Cunarder) より揺れの少ない安定性能をジョンは自慢し、レバー操作で防壁を作れるから家屋ほどの穴があいても絶対に沈没はしないし、将来は無線で航行を制御し、石油の代わりに電気で運行するようになるだろうと予言する。帰宅前にサンダーソン (Sanderson's) に寄るのを忘れていたことを思い出したジョンはジョージに使いを頼み、ヘスターも車に同乗すると言い出して、二人は出かける。似合いのカップル、と評する妻に、男は仕事に打ち込むために早く結婚してはならぬ、と自身40歳で20歳のジャネットを娶った昔話を語る。ジャックは意を決して、造船所勤務を辞める意思を父親に伝え、機械文明への異議申し立てを繰り返す。この『荘厳号』も誤った進歩なのか、との父親の問いに、プールや劇場、ホールまで備えた豪華客船のせいで、昔の水夫たちはいまやチップをせがむ給仕に墮落し、無価値な乗客たちが安逸な船旅を貪っている、と批判するジャック。父親は、

『莊厳号』は単なる機械、単なる豪華客船ではなく、自分が心血を注いだ、美しい生き物 (a living, breathing thing) であり、自分が創業した世界一のサーロウ造船所を子々孫々、受け継ぎ、家名を守るのが務めだと、一步も譲らず、農業経営なんぞにはびた一文も援助しない、と断言する。そこへヘスターが戻ってきて、ジョージにプロポーズされて承諾したから会いに来てほしい、と告げる。赤の他人のジョージでなく、息子のお前に継いで欲しいのだ、と言い残してジョンは退出。地獄行きを望む者を天国に送っても混乱を招くだけ、いくら正しいことであっても、嫌がる者に無理強いするのは間違っている、ジョンが援助しないのなら、私がするしかない、これまで息子の願いをかなえてきたのだから、次は孫の願いをきいてやる番だ、と祖母は語り、ジャックは感謝する。

第2幕。ジャックの住む農家の居間。5か月後の早春の日曜日。農作業で日焼けしたジャックが手紙の文面を練っていると、コーニーリアスが登場。まもなく3時にはジャックの家族(ヘスターと婚約中のジョージも含む)が訪ねてくる予定。コーニーリアスは、大造船所の御曹司を農作業に引き込んだと非難されることを心配し、愚鈍な雌牛(彼の考えではノアの方舟に乗せず溺死させるべきだった)の世話をして黒ん坊 (niggers) のようにあくせく働いても収入はごく僅かの暮らしを、まるで神託を受けたかのように送るのはいかれている (off your head/potty) と嘆き、ジャックの忠告を無視して、ウイスキーに手を伸ばす。彼は、ドイツ軍 (Boche) との戦闘の恐怖から逃れるために覚えた飲酒癖が悪化して酒浸りになっており、農場の負債は年内返済がやっと聞くと、牧牛より利益のあがる牧羊にオーストラリア行きを提案する。自動車の音が聞こえ、迎えに出たジャックは祖母や両親をコーニーリアスに紹介。近々、挙式予定のヘスターとジョージはタイヤ故障を口実に二人きりである。ジョンは娘の結婚に反対で、駆け落ちも辞さないヘスターの態度に譲歩したものの、内心ではまだ不満である。兵役と田舎生活との違いを聞かれたコーニーリアスは、今朝聞いたヒバリの囀りに、戦場で爆幕 (barrage) の応酬が途絶えた奇妙な沈黙に<sup>しじま</sup>塹壕で耳にしたヒバリの囀りを思い出した、と戦争体験のトラウマを語り、婚約者カップルを迎えに出る。労働から得る利益よりも喜びを優先するジャックに、父親は、労働は罰か熱狂のいずれかであり、好きでやっている造船業は苦難と誇りを与えこそすれ、喜びはもたらさない、と反論、祖母は苦痛の中に喜びの思い出が宿ると含蓄のある台詞を漏らす。試験航行間近の『莊厳号』の準備で医者の治療を受けるほど、ジョンは過労気味である。ヘスターたちが遅れて到着し、結婚したら雌牛を一頭飼いたい、と彼女は呑気に言い出す。ひとり手酌のコーニーリアスは反対。農場の見学に祖母や母、ヘスターらは出かけていくが、ジョンはコーニーリアスと残って、酒を飲みながら話を交わす。もともと農場生活に誘ったのはジャックの方で、悲惨な戦争体験を味わい、高貴な理想などつくの昔に失くした自分は、楽で (cushy) ぼろい仕事 (soft job) を望む、と語るコーニーリアスに、息子を造船所に復帰させるために、もし1年以内にこの事業を故意に失敗させてくれるなら千ポンド、即刻手を引いて息子と縁を切るなら五百ポンド出す、という取り引きを申し出る。ちょうどこれを立ち聞きしたジャックがコーニーリアスに回答を迫ると、彼は後者の提案を受け入れると答え、人生に対する挫折感や諦念を語って、去る。遅いのを不審に思った祖母が農場から戻り、事情を察してジョンに詰問すると、彼は五百ポンドの条件提示だけを不承不承説明し、父親への配慮からジャックもこれを黙認する。ところがそこへコーニーリアスが舞い戻り、五百ポンドと千ポンドの中間で折半する (split the difference) 提案を口走る。祖母はさらにこの青年を厳しく追及する。しかし父親を庇うジャックは、千ポンドはコーニーリアスの方から要求したこととうまく取り繕う。母とヘスターたちも戻ってくるが、ジョンはすぐにここを辞去すると伝え、自動車の方へ向かう。祖母は揉めごとの事情をもう一度確かめるが、ジャックは千ポンドの件は胸に収めて語らず、自動車の発車音がしたあと、一行を見送る。

第3幕。3か月後の初夏の午後、ジョンの田舎家の部屋。ウォラー (Edmund Waller, 1601-87) の詩を祖母が朗読していると、ジャックが訪問。コーニーリアスはオーストラリアへ渡ってしまったが、彼はなんとか独力で農場を続け、自己の信念に忠実であろうとして父親のもとへはその後一度も帰っていなかった。その間にジョンの病状は悪化し、近日予定の『莊嚴号』の処女航海の乗船も医者に禁じられている。造船所に戻れとは言わないが、せめてサーロウ家の男の代表として父親代理で乗船してほしい、というのがジャックを呼び寄せた理由だった。しかし、時期的に3週間も農場を留守にはできないし、建造関係者が乗船するのは感傷にすぎない、としてジャックは断る。実の倅が親のためになにひとつしてくれぬ、と憤るジョンに、農場での面会の折りの仕打ちで帳消しになったはずだ、と反論するジャックだが、千ポンドの件は口をつぐむ。ジャックの偏狭さを祖母が咎めると、ジョンは千ポンドでの買収行為を自ら告白、それは祖母を傷つけまいという配慮からだった、と弁明し、息子が拒否するなら、たとえ死んでも自分が乗り込む、と主張する。この言葉にジャックは折れて、代理乗船を了承し、出航が明後日の火曜と聞いて、すぐに準備に立ち去る。祖母は再びウォラーの詩の一節を朗読し、たとえ落胆させられても愛情に変わりはない、とジョンを慰める。(第1場)

5日後のジョンの田舎家の庭の片隅。『莊嚴号』は航行3日目を過ぎ、これまで順調な航行との電報をジョージから得ていたが、最新情報が届かないのに苛立つジョンに、祖母はヘスターが懐妊したため、ジョージが気をとられているのだろう、と告げる。ジョンは赤ん坊が男の子で造船技師になってくれればいい、と喜び、祖母は子どもたちはみんな異国への長い航海に出て行く船のようなもの、と感慨深げに語る。しかし、そこへジョージが悲惨な知らせを伝えに来る。『莊嚴号』は氷山に衝突し、わずか20分で沈没したのだった。『莊嚴号』の沈没を嘆くジョンは、乗船していた息子ジャックも溺死したと悟り、祖母の腕の中に崩れ落ちる。(第2場)

数時間後のジョンの田舎家の部屋。『莊嚴号』の模型を眺めていたジョンは拳銃を持って戻り、頭に押し当てて自殺を図ろうとする刹那、祖母がやってくる気配に消灯して身を潜める。明かりを点けた祖母はジョンを発見し、テーブルの銃に気づいて愕然とする。もし父が乗船していたら船とともに沈んだらから、父の代理の自分は父の意思に従う、と言い残して離船を拒否したジャックの最期の様子を知らされ、妻の言うように、自分が息子を殺したのも同じだ、とジョンは自責の念にかられる。お互いが一步も譲らず折り合いをつけなかったのが間違いであるけれど、自殺しても息子は戻らない、やがて生まれる孫に造船の仕事を託し、前向きに生き続けることこそ大事だと祖母は諄々と説き、ジョンを信じて銃を彼に返す。ジョンは寝室に下がり、祖母はひとしきり泣き、月明りの庭を眺めたあと、消灯して部屋を出ていく。(第3場)

氷山にぶつかって処女航海で沈没した『莊嚴号』が、1912年のタイタニック号沈没事件をモデルにしていることは言うまでもない。造船都市ベルファーストの誇りであったタイタニック号の呆気ない悲運は、北アイルランド出身の作家アーヴィンの心にも深い傷跡を残したに違いない。思想や観念の提示に主眼が置かれた印象のある、重い雰囲気支配する作品であるが、新しい船の建造という目標に心を切り替えてこの挫折を克服しようという作者の決意が終幕にはこめられている。

自分が歩んだ道を息子に継がせたいと願う父親と、自分で選んだ道を進みたい息子の対立という図式は、初期作品の『オレンジマン』の主題と共通し、結果的には若い世代の考え方を著者が支持しているようにみえる点も同じである。孫ジャックのよき

理解者であるサーロウ夫人は、均衡のとれた円熟した智恵の体言者として描かれており、「もっと遠い所にいたなら、アイルランド人と仲良く暮らしていけるのに、と思うことがあるわ」(33)という台詞は、ある意味で近親憎悪的なイギリスとアイルランドの隣国関係をうまく言い表している。父と子に典型的な世代間の対立・葛藤の主題は、アーヴィン演劇すべてに窺える大きな特色である。

②『進歩』(*Progress*) 1922 1幕

1922年4月3日、ロンドンのリトル・シアター (Little Theatre) で初演。演出はキャソン (Sir Lewis Thomas Casson, 1875-1969)。キャソンは俳優でもあり、ショーやシェイクスピア劇の演出家としても知られ、1908年に女優ソーンダイク (Dame Agnes Sybil Thorndike, 1882-1976) と結婚後、ともに活動した人物である。初演ではコリ教授をキャソン、メルドン夫人をソーンダイクが共演している。

舞台設定は1919年の春、北部イングランドの田舎村にあるコリ教授 (Professor Henry Corrie, D. Sc.) の書斎。レトルトで実験に没頭している、50代の科学者である教授はようやく実験に成功し、歓喜の声をあげる。召使の老女ハナ (Hannah) が、教授の妹メルドン夫人 (Mrs. Charlotte Meldon) の来訪を伝え、たいそう沈鬱なご様子、と言いつけるが、駅まで出迎える約束をすっぽかしていながら、実験成功の高揚感で、教授には少しも悪びれたところはなく、それどころか、英国政府にも売り込める大発明だと夫人に吹聴する。この日は、砲弾を浴びて戦死した彼女の19歳の一人息子エディ (Eddie) の3年目の命日に当たり、彼女は献花をハナに用意させていた (彼女は夫トムも戦時中に失っている)。しかしながら、教授の念頭には、この発明品——5年の大戦を5週間で終わらせる強烈な破壊力を持つ武器——しかなかった。夫人の苦悩の原因は、息子が戦場で埋葬されたと伝える部隊長の手紙は偽りで、塹壕に8日間もとどまった挙句に、4人の仲間ともども木っ端微塵に砲弾で吹き飛ばされたのが真相であると、この日、街で偶然出会った息子の戦友から聞かされたことにあった。教授が開発したのは、まさしくこうした新型爆弾、たった一発で何千人もの人間、マンチェスター市民全員を抹殺できる毒ガス入りの爆弾であり、2,30年先に来たるべき第2次世界大戦には英国のために使用され、敵国の研究者も同様な兵器を開発するかもしれないが、先制攻撃を仕掛けるのだという。夫人はいかに息子がかけがえのない存在だったか、切々と訴える。出産前の不安、赤ん坊の可愛さ、クリケットの初試合で10点挙げた勇姿、オックスフォード在学中に志願し、休暇で帰国したときの逞しさ…。しかし、詮なき繰り言としか響かない教授は、この発明で得られる巨額の富と名誉しか思い巡らさない。夫人はさらなる人命の犠牲をなくすために、この発明を破棄するように教授に迫る。もちろん教授は拒否し、夫人はテーブルをひっくり返して実験道具を破壊する。しかし、製造方法は自分の頭の中にあるから無駄だ、と後片付けを始める教授の背中に、夫人は偶然目にしたナイフを突き刺し、殺害する。床に落ちた献花を胸に押し当てて、こうするほかなかったのよ、と夫人は亡き息子に呼びかける。

アーヴィンの反戦思想が顕著に投影された佳作である。第1次大戦終戦の翌年に早

くも的確に第2次大戦を予測——「20年か30年後にはまた戦争があると思うだろう？ いずれにせよ、50年以上先ではない」(44)——し、戦争の早期終結効果を口実に、原子核爆弾の開発に従事する科学者の身勝手な論理を浮き彫りにしている。アーヴィン自身が従軍先のフランスで片脚切断に至る重傷を負った経験を持つことが、この作品の執筆動機になっていることは間違いない。標題の『進歩』という語はテキストには出てこないが、科学技術の進歩が人道の進歩と矛盾する皮肉を示している。そしてこの対立が兄と妹、すなわち男と女の対立である点も興味深い。爆弾が突如暴発し、発明者である教授を破滅させる結末を迎えた方が、科学の進歩に異議を唱える著者の意図にかなう幕切れではないか、と示唆する論者もいる<sup>3)</sup>。

### ③『ベルモントのレイディ』(The Lady of Belmont, 1923年刊) 5幕

シェイクスピアの『ヴェニス商人』(The Merchant of Venice, 1596)でアントーニオの裁判が行われたちょうど10年後。24時間以内にすべての舞台進行が収まる。

**第1幕。**夕方の早い時期、ベルモントのポーシャ(Portia)の屋敷の中庭に面した部屋。ポーシャの執事バルサザー(Balthasar)が、訪ねてきたネリッサ(Nerissa)にポーシャの従兄弟にあたる法律家のベッラリオ博士(Doctor Bellario)が10年ぶりにパドヴァから来訪する予定があると伝える。博士の来訪は、ポーシャの夫バッサニオ(Bassanio)の浪費癖を訓戒してもらうためらしい。すっかり老けこんだアントーニオ(Antonio)が続いて現れ、今日は特別な水曜日、10年前のまさしくこの日に胸の肉1ポンドを奪われかけたのだと興奮して伝え、外科手術で死なずにすんだかも知れないが、それにしても騒動の原因を作ったバッサニオの忘恩はとんでもない、と嘆く。フランス出発を控えたロレンゾウ(Lorenzo)が挨拶に来る。彼はシャイロックの娘ジェシカ(Jessica)と結婚している。続いてそのロレンゾウの召使ゴッポー(Gobbo Launcelot)も来るが、彼はバッサニオに秘密の伝言を携えている。ゴッポーはかつてシャイロック、その後バッサニオに仕えていたが、ポーシャに嫌われてロレンゾウの召使となった。ゴッポーもこの日が裁判10周年記念日とは知らず、美德より悪行を覚えるのが人の常だから、肉を切り取られていたら記憶に残ったかもしれない、と答える。当家の主人バッサニオが、ネリッサの夫グラシアノー(Gratiano)を伴って登場するが、二人も今日が記念日であることを忘れており、アントーニオ解放日というよりも各自の結婚記念日という認識しかない。ポーシャが姿を現し、ロレンゾウはフランスに向け出立。ポーシャは10年前の事件の手紙の偽造や仮装について説明し、法律家としての評判を落とされたことで激怒して絶交状態にあったベッラリオ博士が、いまでは許してくれて、バッサニオの濫費による負債の返済法の相談に来訪してくれる旨を述べる。博士を歓迎すべく、色とりどりの照明や音楽の指示をバルサザーに与えてポーシャ退場。ゴッポーはバッサニオを引き止めて、夫ロレンゾウが留守の間に密会したい旨のジェシカの伝言を伝える。博士到着まで2時間以上あるから間に合うし、麗しのジェシカ様がお越しを恋い焦がれています、とバッサニオを手本にしたという口説き文句で促すと、バッサニオも折れて、〈道中の博士を出迎えに行く〉と嘘の伝言をバルサザーに残して退場。伝言はポーシャに届けられ、彼女は召使ステファノー(Stephano)を呼んで悲しい恋歌を歌わせる。博士からの使いが到着し、まもなく予定より2時間早く到着すると告げるが、バッサニオには出会わなかったと伝える。ポーシャは使者をも

てなすように指示し、バルサザーは、ロマンティックな恋に溺れず、中庸が肝心だと人生訓をステファノーに与えて、歓迎準備を陣頭指揮する。華やかな出迎えのなか、ベッラリオ博士が到着。10年前の事件で名声が失墜したことをしきりにこぼす。博士もまた、アントーニオを覚えておらず、彼の姿は苦い思い出を蘇らせる、とつれないので、アントーニオは宴には出直す、といったん自宅へ帰る。バルサザーが現れ、屋敷の玄関口で気絶している、身なりの良い外国人の老人がいる、と報告する。召使たちに介抱された老人は意識を取り戻して礼を述べるが、ポーシャに見覚えがある、と語る。休養のために邸内の部屋に向かう際、彼は自分の名はシャイロックだと告げ、ポーシャは驚愕し、博士は面白いことになるぞ、と叫ぶ。

第2幕。2時間後の同じ場所。アントーニオは宴に出席し、自分がこなければ、<sup>いさか</sup>些か諍いのもと (A slight from me, however slight!) と親爺ギャグを飛ばすが、バルサザーには通じない。ヴェニスから来た、先程の老人の話聞いたアントーニオは、きっとヴェニス公 (Duke of Venice) がお祝いに駆けつけたのだ、と早合点する。愛人宅からようやく戻ってきたバッサニオにも彼はヴェニス公の来訪を伝える。バッサニオはバルサザーに老人の名前を確かめに行かせる。ネリッサと夫のグラシアノーも宴に呼ばれ、仮面舞踏会 (masque) があると喜ぶ夫を年甲斐もない、とネリッサはたしなめる。バルサザーが戻り、老人の名はシャイロック、と報告すると、一同は啞然となる。娘のジェシカに会いに来たのだと知ったバッサニオは、シャイロックをすぐに連れて来るように命じる。(ゴッポーは、喧嘩別れしたジェシカも、宴に招待されているので、あとで抜け出して密会するように勧める。) シャイロックは一同と対面して困惑し、体調がすぐれないので一晩だけ泊まることを申し出るが、バッサニオは即刻退去を命じる。裁判によってユダヤ教徒からキリスト教徒に強制的に宗旨替えさせられた (洗礼の名付け親はアントーニオ) シャイロックは、そのお陰でヴェニスの市民権を獲得したばかりか、ヴェニス公に仕えるほど裕福になり、元老員議員 (Senator) にまでなったことをアントーニオに感謝する。(ヴェニス公もまたアントーニオを「説法を垂れる退屈な紳士」としか記憶に止めていなかった。) しかし、バッサニオはシャイロックをあくまでもユダヤ人だと決めつけ、退去を迫る。シャイロックは宗旨は生まれながらに神の定め賜いし運命であり、借金を踏み倒して親友の生命まで危険にさらしたバッサニオの忘恩をなじる。騒ぎを聞きつけたポーシャが登場。加減の悪い老人を深夜に追い出すことは出来ないし、すでにもめごとは勝訴で決着を見ているから、とシャイロックを休ませようとするが、それなら自分が出て行く、とバッサニオ。そこへジェシカが到着し、父親シャイロックを見て、驚く。ヴェニスに帰るように促す冷たい娘の対応をシャイロックは非難する。財産を持ち出して異教徒のロレンゾウと駆け落ちしたあとまったく音信不通で、おまけに妻の形見のかけがえのない指輪までジェノアで換金したからである。さらに、ジェシカの3人の息子たちは、ロレンゾウ、アントーニオ、バッサニオと命名され、祖父シャイロックの名前はおろか存在も教えられず、3男などはユダヤ人への悪口を触れ回っていると知らされる。それでも自分の血が流れているから孫たちはユダヤ人だと断ずるシャイロックを、グラシアノーやバッサニオは、法的にキリスト教徒、生まれはユダヤ教徒の中間的存在 (Jew-Christian, Christian-Jew) だと反論する。やがてベッラリオ博士が登場。自分が法廷に出ればシャイロックの勝訴は確実で、アントーニオの体重はいまごろかなり減っていただろう、と冗談を飛ばし、キリスト教徒に改宗したシャイロックをユダヤ教徒呼ばわりするのは名誉棄損であるし、出迎えに出たといいながら一本道でわしの姿を見失うようなら眼医者に診てもらえ、と咎める。ジェシカの家を宿泊することを彼女が拒否するので、ポーシャは邸内に一泊するようにシャイロックを説得し、彼は従う。ポーシャが他の招待客をもてなす間、ジェシカはバッサニオに今夜は御意のまま身を委ねると切り出すと、バッサニオは彼女の恋の焦らし戦術を非難し、素直に男の言いなりになる女が好きだ、深夜零時すぎに訪ねて行く、と約

束する。一同が宴席に去ったあと、シャイロックが登場し、ゴッポーをつかまえて、礼はずむから、孫たちの寝顔をちょっと眺めるためにジェシカの家案内するように頼む。ゴッポーはジェシカの言伝を受けた後ならいいと、この買収に応じる。宴の音楽に耳を傾けるシャイロック。

第3幕。3時間後のポーシャ邸の柱廊の間。招待客が踊りに興じ、ポーシャは博士と、バッサニオはジェシカと、グラシアノーは若い美女と踊っている。妻ネリッサは嫉妬に燃えながら夫と娘を見つめている。いっしょに座ってシャイロックの話題ばかり繰り返すアントーニオは、自分がほじくり返しているのではなく、シャイロックこそわが肉をほじくり返そうとした (NERISSA. Oh, hold your peace about the Jew!/ ANTONIO. Faith, he nearly held a piece of me. [51]; 下線は引用者)、と再び親爺ギャグを飛ばす。ネリッサは、ポーシャがバッサニオとうまく結ばれた裏話を語り、金目当ての求愛者を退ける策謀の裏をかいて、金、銀、鉛の3種の箱からバッサニオには鉛箱を選ぶように、他の求愛者には鉛箱以外を選ぶように教えたのは自分だと暴露する。ダンスが終わり、ポーシャとバッサニオはふたたびシャイロックの宿泊を巡って口論となる。ポーシャはジェシカを呼んで、父親シャイロックへの愛情はないのか、夫ロレンゾウを愛しているか、バッサニオについてはどう思うか、と尋ねる。ジェシカは、父の遺産が娘夫婦に死後相続される判決が下りたから父が裕福になったのは喜ばしいが、愛してはいない旨を伝え、夫はもちろん愛している、バッサニオは口説き上手との評判、などと答える。バッサニオの機嫌を損ねないために、シャイロックを今夜、家に引き取って貰えないか、とのポーシャの申し出に、ジェシカが身を震わせて拒絶するので、ポーシャは諦める。続いて、ベッラリオ博士がバッサニオの過剰な濫費を諫め、儉約生活と中庸を説き、信用を失って誰も援助しない状況を考えれば、シャイロックと和解して彼から金を借りるように勧める。しかしバッサニオは高利貸しはまだしも、和解することは拒み、妻を今後、増長させないためにも出て行くと息巻き、博士に無心を申し出る。博士は、美貌を頼りに浮気に走るバッサニオが容貌の衰えと共に辿る末路を語り、哀れなポーシャを思って救済策を申し出たにすぎない、とバッサニオへの嫌悪を露わにして、立ち去る。ジェシカがバッサニオに近づき、ポーシャから探りを入れられたこと、退屈な夫ロレンゾウではなく荒々しいバッサニオを愛していると語る。そこへグラシアノーがネリッサと現れ、もめごとなしにシャイロックを追い払う計画——男装で裁判を歪めたポーシャやネリッサの正体を暴露して、彼を激怒させる——を語る。しかし、言葉で説明しても信用されないだろう、として、ネリッサは別の計画——10年前の裁判劇の再現を余興で行わせ、男装の裁判官姿のポーシャを、陰からシャイロックに目撃させる——を思いつく。ネリッサは言葉巧みに計画を進行させ、博士自身が希望しているから昔の裁判劇を再現し、別室のシャイロックの目には触れないように配慮するとまで言うので、ポーシャも承諾する。アントーニオは二度も被告役をシャイロックの眼前で演じるのは気乗りがしないが、押し切られる。招待客たちが観劇に呼び込まれ、ほぼ同じキャストで裁判劇を再演し、シャイロックを追い出すのが狙いだと説明する。体調を理由に固辞していたシャイロックも、ポーシャの懇願という嘘に騙されて、不承不承、柱の側の席につく。やがて法衣姿のポーシャが登場、シャイロックと視線を合わせる。ポーシャは帽子を脱いで正体を白状し、遅れて登場した博士もこの陰謀とは無関係で、バッサニオの策略だと聞くと、シャイロックに謝罪し、夫にも謝罪させようとするが、彼が拒否するや、邸から出ていくように命令する。金や延命のために宗旨替えするようなユダヤ教徒を許せるか、命を投げ出すべき祖国も持たぬ彼らをのさばらせてはならぬ、とバッサニオはアジ演説をぶつ。改宗させられたが、信仰は維持している、というシャイロックに、キリスト教徒なのか、ユダヤ教徒なのか、と獐猛な口調でバッサニオは踏み絵を迫り、扇動された客たちは「偽りのユダヤ人」「裏切りのユダヤ人」「ユダ」と嘲弄の言葉を浴びせかける。ポーシャはバッサニオを含む客人すべてに出て行くように叫び、自重を求める彼女の言葉も振り切って、シャイロック



は自分が心底はユダヤ教徒であると宣言し、着衣を脱いでユダヤ人の装束を見せる。バッサニオはユダヤ人のいる屋敷にはいられない、グラシアノーの家で宴を続けると言い放って、客人を誘って出て行く。シャイロックが低利での融資に同意してくれていたことを博士から聞かされたポーシャは、恥ずかしさで消え入りそうになるが、シャイロックは、バッサニオと仲直りするように淡々とした口調で勧め、自らは娘ジェシカの家へ向かう。

**第4幕。**ロレンゾウとジェシカの家の一室。シャイロックがゴッポーに案内されて、登場。子どもたちの就寝をゴッポーがいったん確認するが、9歳の長男ロレンゾウが起き出して、シャイロックは彼を膝に乗せて会話を交わす。シャイロックの名を初めて耳にした長男は、この見知らぬ老人の妻に自分がよく似ていると言われて、弟たちの寝顔を見せにシャイロックを子ども部屋へ案内する。成り行きを案じたゴッポーはアリバイ工作に家から逃げ出す。戻ってきたシャイロックは、祖父に会いたくないか、と尋ね、祖父をユダヤ人呼ばわりしたゴッポーを自分も父親も懲らしめてやった、と長男は語るが、優しいシャイロックがユダヤ人と聞いて、ユダヤ人はみんな邪悪、という思い込みを改める。眠気を催した彼は寝物語をせがみ、いつしかシャイロックの腕のなかでまどろみ、彼は子ども部屋へやさしく運ぶ。ジェシカが帰宅し、庭に潜んでいたバッサニオを窓から迎え入れる。二人は抱擁してキスし、バッサニオは自分の女性遍歴を自慢し、永遠の愛は約束できないが、できるだけ長く愛する、一人の男を独占しようというのは傲慢だ、と彼の方こそ身勝手な告白をする。そこへ子ども部屋からシャイロックが登場。驚くバッサニオに、旅館まで案内するように依頼するが、彼は拒絶する。娘の不貞を咎め、夫婦の絆を守るために、シャイロックはバッサニオに退去を命じる。そこへノックの音が響く。応対に出たジェシカの他に、ポーシャとロレンゾウの声を聞きつけたバッサニオは、シャイロックを連れて子ども部屋へ身を隠す。ポーシャとロレンゾウが登場し、バッサニオが来ていないか、厳しく詰問するが、ジェシカはしらを切り通す。庭で見張り役をしていたバルサザーがゴッポーを取り押さえて拷問するが、彼も潔白を主張する。しかしバルサザーは、窓辺に男の人影を目撃したと証言、まだ屋内に潜んでいると判断したロレンゾウが、ジェシカの必死の制止を降り払って子ども部屋の捜索に踏み込もうとしたとき、シャイロックがひとり、姿を現し、こっそり孫の顔を見に来たが、ロレンゾウの怒りを買わぬように隠れていた、他には誰もいない、と断言する。疑念の晴れたロレンゾウは無言で涙を流すジェシカを抱き締め、ポーシャを見送りに通りへ出る。直後にジェシカはバッサニオを呼んで、彼はシャイロックに礼を言って、窓を越えて脱出する。しかし、別れの挨拶に戻ってきたポーシャに後ろ姿を目撃される。シャイロックはポーシャの善意に報いるために、嘘をついて庇い立てたことを認める。妻ジェシカの傷心を慰め、すばらしい紳士であるシャイロックを愛するようにロレンゾウに助言して、ポーシャは一人で立ち去る。

**第5幕。**翌朝のポーシャ邸の花咲く庭。ポーシャはステファノーの歌声に聞き入っている。かつてバッサニオの〈箱選び〉のときに、彼の父親が歌った思い出の曲である。バルサザーが、ロレンゾウ、ジェシカ、シャイロックの3人の来訪を告げる。入れ替わりに、バッサニオが帰宅。シャイロックが退去したから妻を許しに戻ってきた、と言う彼は、浮気現場を目撃されたことを知らない。だが、3人が揃って来訪したと知って、追い返そうとするが、すでに彼らは登場。ロレンゾウはバッサニオの秋波 (attentions) に妻ジェシカが迷惑していることを告げ、実際、ポーシャは、不倫情報も寄せられたのでロレンゾウとともに深夜にジェシカの家を抜き打ちで調べたが、シャイロック以外の人間は見つからず、容疑は晴れた、という一部始終を、思わせぶりの口調を交えて語る。バッサニオとジェシカは互いに無実を装う発言を貫く。シャイロックは、来訪の目的は、娘夫婦と孫たちを連れてヴェニスに帰るので、別れの挨拶に来たのだと告げる。ポーシャは祝杯に誘う。シャイロックはこの決断は、ポーシャのためでもあるし、自分のため——娘夫婦はいつでもよいが、血を分けた孫た

ちには立派に育つように期待をかけている——でもあると言う。そして親切にしてくれた恩返しにポーシャ夫婦に金を貸すつもりだ、と言い添える。まるで肉1ポンドを奪う復讐が成就したみたい、と自嘲するポーシャに、シャイロックは自分たちユダヤ人が軽蔑されるのは、ユダヤ人の方も偏狭な自尊心から他民族を軽蔑しているからであるが、人々を指揮して寛大な政府や社会を建設する力が自分にはある、と主張する。ポーシャはユダヤ人が根無し草のように世界中を彷徨するのではなく、他民族と共存して祖国のために命を賭けるようにならなくてはだめだ、と説く。シャイロックは善行だけがこの世に残ると考え、ポーシャの幸福のために一家を挙げて引っ越すのだ、人間は互いに許し合わねばならない、と答える。シャイロックの腕を取り、ポーシャは室内へ入る。ステファノーの歌声が終わる。

有名な文学作品の続編執筆は、原作を凌駕できないで終わることが多いが、『ヴェニス商人』の10年後の後日譚を描くこの作品は、すっかり年老いたアントーニオの滑稽さを中心に前半は喜劇的なパロディとして展開し、やがてユダヤ人への人種・宗教差別の問題や罪の赦しの問題が、不倫騒動のどたばたの影に、深刻な形で提示される。バッサニオとジェシカの不倫カップルへの処遇が甘い印象は残るが、シャイロックが復讐心に燃えることなく、寛容な気持ちからポーシャの厚意に報い、原作以上に度量の広さを見せている点は興味深い。ただそれも、裁判の結果、シャイロックに現世的成功がもたらされ、彼が世間を余裕をもってみつめることができるだけの社会的信頼や名声を得ていたからであり、もし不遇な目にあっていっそうひどい辛酸を舐めていれば、こうした寛容な行為を期待することはできなかつただろう。この作品に顕著なシャイロック擁護の姿勢には、寛容の精神によってキリスト教とユダヤ教の対立を解消し調停する意図が託されているとも受け止めることができ、プロテスタントとカトリックの対立を解決する手掛かりを著者アーヴィンは模索していたのかもしれない。

なお、最後のポーシャの台詞「根無し草のユダヤ人」云々は、もちろん17世紀初頭の時代設定によるが、この芝居が1923年に出版され、まだ1948年のイスラエル国の建国には四半世紀前だったことを想起せねばならない。

#### ④『メアリー、メアリー、すこぶるつむじ曲がり』(Mary, Mary, Quite Contrary) 4幕

上演記録はテキストに記されていないが、初版刊行は1923年。献辞はジョン・ドリンクウォーター (John Drinkwater, 1882-1937) に宛てられ、マザー・グース<sup>4)</sup>にちなむ標題の「メアリー」と「コントレアリー」が中間韻を踏んでいるので、邦訳では脚韻を「り」音で踏ませてみた。

**第1幕。** 8月の金曜の午後、イングランド南岸の漁村ヒントン・セント・ヘンリー (Hinton St. Henry) にある牧師館の庭。縫物をする50歳前後のコンスィディン夫人 (Mrs. Mildred Considine)

と姪で24歳のシーラ (Sheila Considine) がテーブルに座っている。夫人の息子ジェフリー (Geoffrey) が執筆した詩劇の舞台上演採用を決定してくれた、有名女優メアリー・ウェストレイク夫人 (Mrs. Mary Westlake) の到着を待っているが、好意を寄せるジェフリーが夫人に並々ならぬ関心を示すのがシーラには気がかり。年上の女性に惹かれるのは一時の気の迷いで、自分は利口だと夫が思い込み、利口でないふりを妻がするのが結婚成功の秘訣よ、と夫人は元気づける。ジェフリー登場。ラグビー校出身のハンサムな25歳の青年。案の定、ウェストレイク夫人を、子どものような純朴な性質と女王のような態度とが同居した素晴らしい女性と賞賛し、シーラは鼻白む。ウェストレイク夫人の夫ジェームズ (James) についてはジェフリーもよく知らず、夫人の激しい気性を持って余して海外で別居中もしくは死別、とのみ答えて、駅まで出迎えに行く。入れ替わりに、シーラの叔父でコンスィディン夫人の義理の弟にあたる53歳のヘンリー卿 (Sir Henry Considine) が登場。彼はK.C.M.G.<sup>5)</sup>の称号を持つ、元アンダバー総督 (Governor of Andabar) である。インド洋に浮かぶアンダバー諸島では、革命を招きかねないほど統治に失敗し、いまだ独身のこの叔父がウェストレイク夫人に思いを寄せてジェフリーの恋路の邪魔をしてくれれば、とシーラは懇願するが、自己犠牲の実践は御免だ、と彼は拒否し、シーラの人生経験の不足を批判する。バーナード・ショーの戯曲全集を読破したから人生には通じている、と反論する彼女に、この問題は機転を利かせて ('By tact!') 処理しよう、とヘンリー卿は請け合う。コンスィディン夫人の夫でヘンリー卿の実兄にあたる、この村の教区牧師キャノン (Reverend Canon Peter Considine) が登場。彼は文学修士 (M.A.) の称号を持つ。乗用車の音が聞こえ、コンスィディン夫妻が迎えに出る。ウェストレイク夫人が到着。35歳とも45歳とも見える美人女優で、職業柄、演技がかった言動が身についている。景観や住居の美しさに感嘆し、挨拶を交わす。ヘンリー卿がアンダバーの婚姻史について執筆中と聞くや大いに興味を示し、滞在中に詩を書いてほしいと頼むなど、初対面ながら夫人とヘンリー卿は意気投合した様子。遅れて夫人のマネージャーで47歳のホップズ (Mr. Albert Hobbs) が登場し、一同と挨拶を交わしたあと、興行の裏話をコックニー訛りで披露する。たとえば、90人ものヌビア人<sup>6)</sup>奴隷のキャストが必要な東洋劇の上演をウェストレイク夫人が気紛れから提案した際には、カーディフ出身のアジア系混血のキャスト2名で代用して経費節減を図ったという。宿泊する部屋に夫人とホップズが下がった後、ジェフリーはホップズへの不快感を表明し、ウェストレイク夫人(これ以後、彼はメアリーと呼ぶことを許される)もホップズを、チンパンジーの省略形「チム」(Chim) と気安く呼んでいる、と伝える。着替えを終えて下りてきた夫人はヘンリー卿にアンダバーの話題を向け、このイギリス植民地の諸島が広範囲に点在している事実を初めて聞いて、マン島 (the Isle of Man) 以外の植民地は知らない、と語るが、マン島は植民地ではない<sup>7)</sup>、と卿は訂正する。冒険に満ちた人生を送ってきた逞しい男性が好みのタイプで、さぞかし女性に人気のおありでしょう、と夫人はヘンリー卿に誘惑的な台詞を送り、プロテスタントの長老派信徒 (Presbyterian)、つまり非英国国教徒であるホップズを無神論者呼ばわりしてからかう。やがてジェフリーが朗読のために自作詩劇の原稿を手に見せ、夫人は彼の回りに車座に皆を座らせ、自分は離れて座る。『ジャンヌ・ダルク——5幕の詩劇』と題されたジェフリーの戯曲の朗読は、シーラや女中の登場、ホップズの半畳などによってしばしば中断させられる。とくに、13歳の少女と1幕で設定されているジャンヌ・ダルクを中年のウェストレイク夫人が演じるのは無理、とホップズは主張。これに対し、女優には年齢はない、全責任を負って自分が演じる、と夫人は反論する。芝居の結末が史実に則って焚刑であると知って、土壇場で恋人に救助されるように潤色する方が興行上は有利、とホップズは提案。結局こうして、戯曲本文の朗読に入らぬまま、お茶の時間となる。庭に残ったジェフリーはウェストレイク夫人に、楽屋口まで押しかけた熱烈なファンであることを伝え、二人は軽くキスを交わす。偶然その様子を目撃したシーラは、お茶に来るように

素知らぬ顔で伝えて引き返す。

第2幕。同日の夕食後の居間。シーラは悄然とピアノに向かい、コンスィディン夫人とウェストレイク夫人は歓談。ウェストレイク夫人はシーラに自分のことが嫌いでしょう、ジェフリーと結婚したいのね、と単刀直入に切り出し、シーラは当惑。そこへ50歳の独身女性で、教会の奉仕活動に熱心なミムズ (Miss Mimms) 女史がガールズ・ガイド (米国のガール・スカウトに相当) 団長の制服姿で登場。ウェストレイク夫人は、ボーイ・スカウト団員のように、渾名 (たとえば「スィティング・ブル」<sup>8)</sup> (Sitting Bull) や「ラフィング・ウォーター」<sup>9)</sup> (Laughing Water)) をお持ちかと、と尋ねるが、ミムズは否定する。ミムズ来訪の目的は、ガールズ・ガイド幼年部の「ブラウニーズ」<sup>10)</sup> (Brownies) の催しでの司会役依頼だったが、夫人は適任者としてホップズを推薦する。食堂から男性陣が入室。ミムズは10年前までケント州ターンブリッジ・ウェル (Turnbridge Well) にいたが、農村生活の改善が英国には必要だと悟ってこの村に定住、爾来、酒浸りの村人を蓄音機によって音楽愛好家に改心させるなど尽力してきた、と述懐する。45分後にまず救急治療講習から催しが始まるとあって、ミムズは会場へ戻り、まんまと乗せられたホップズは悔しがる。ウェストレイク夫人はブラウニーズの催しには行かず、月明りの下、ジェフリーと舟遊びをしたい、と言い出し、シェイクスピアの一節を口ずさみつつ、キャノンとともに庭へ散歩に出る。ジェフリーの芝居は詩的部分を割愛して血なまぐさく改編すれば観客に受ける、とホップズは言い、かつてビービー (Mr. Beeby) という劇作家が書いた芝居——大西洋の孤島に漂着した女性主人公が、かつて赤ん坊のときに同じように海難事故で漂着して、雌ヒヒ (baboon) に育てられたために自分をヒヒと思い込んでいる野生児の青年と出会う、という奇抜な設定の芝居——を持ち出し、まさしくウェストレイク夫人にぴったりな役回りだが、彼女は一顧だにしない、と嘆く。ブラウニーズの集会での演説草稿を練りに自室へ戻ろうとするホップズにシーラは、夫人に関する個人的な質問を浴びせ、夫人の夫が死去したと知ると落胆、好きなジェフリーが夫人に夢中なので嫉妬している、と涙ながらに告白する。それに対して、長年のつきあいのあるホップズの助言は、嫉妬心を見せずに無視してかかること、夫人など存在せぬかのように平然と振る舞うこと、であった。夫人の指示でシーラを呼びにきたジェフリーに、おごりな扱いを受けている憤懣を彼女はぶつける。独り恬淡と散策を楽しんでいるヘンリー卿と違い、色目を使い媚びを売る中年女優にうつつを抜かしている、とシーラが非難するのを立ち聞きしていた夫人は、何食わぬ様子で顔を見せ、気が変わったので舟遊びはヘンリー卿と一緒にしたい、と言い出すのでジェフリーは抗議、あわてて浜辺に舟の手配に出かける。舟遊びの件を耳にしたヘンリー卿に、夫人は叔父さんに気があるとシーラはけしかけ、自分もジェフリーを手放したくない、何があっても彼と結婚する、と訴え、ジェフリーと逆の道を通って夫人を舟遊びに連れ出すように懇願する。肩掛けを身につけて夫人が登場。ヘンリー卿の自制心や泰然自若な美点を賞賛し、ジェフリーはまだひよっこで、哀しみに共感できる、慰みと支えを与えてくれる逞しい男性に女は惹かれるもの、と秋波を送る。庭からほかの人々が戻る声が聞こえてきて、ヘンリー卿は夫人に舟遊びへの同行を懇願。夫人は承諾し、二人は揃って出かける。間際に出会ってその旨の伝言を受けたホップズは、コンスィディン夫妻やシーラに伝え、シーラは歓喜の声を上げる。浜辺から戻ってきたジェフリーは、入れ違いに夫人がヘンリー卿と浜辺に出かけたことを知らされ、愕然とする。ガール・ガイド集会へのホップズの誘いを断り、椅子に身を投げ、「ヘンリー叔父さんの野郎！」と悪態を吐く。

第3幕。翌朝、土曜日の朝食前の居間。朝刊を読むキャノンにジェフリーが挨拶。昨晚のホップズの演説はひどい代物だったが、ミムズは意外にも気に入っていた、とキャノン。ウェストレイク夫人とヘンリー卿の帰宅時刻を女中に尋ね、帰宅しなかったとの報告に二人は仰天する。海難事故を心配する二人に、やってきたホップズは夫人は絶対に溺死なんぞしない、と平然とした様子。シーラも登

場。妻に連絡して対応策を訊くようにキャノンにはシーラに依頼、コンスィディン夫人が駆けつける。夫人は漁師たちに事情を連絡し捜索してもらうように、ジェフリーを使いを走らせ、夫には警察への通報を指示。窓辺にいたシーラが、行方不明の二人が帰ってきた、と叫ぶ。二人とも防水服(oilskins)と時化帽(sou'wester)を上にとっている。疲労困憊気味のヘンリー卿はホット・ウィスキーと風呂の準備を所望する。二人の事情説明によれば、ハイド・パークのサーペンタイン池でしか漕いだ経験のないウェストレイク夫人が舟を漕ぎたがったのが間違いのもとで、入り江の外海の荒波にオールを流されてしまい、右肩にリューマチを持つヘンリー卿が取り戻そうとしても、夫人が立ち上がった舟が動揺して出来ずじまい。そのまま大海を漂流し、怖じ気づいてまったく頼りにならないヘンリー卿をよそに、「イギリス人だから頑張れ」と夫人は必死に自分に言い聞かせて鼓舞したという。夫人は説明の途中で着替えを申し出て、コンスィディン夫人に付き添われて退出。あとを受けたヘンリー卿は、オールを落としたのは故意の疑いがあること、漂流中、インド洋を筏で漂流していた男10人が喉の渇きに耐えかねて娘を殺して生き血を啜った、といったおぞましい話ばかり夫人は語り続けたという。やがて延縄漁船(trawler)に遭遇して救助されたのはいいが、すぐ上陸させてくれる申し出を夫人が断ったため、漁の終わるまでヘンリー卿はサバの山の隅に押し込まれ、一方の夫人は酒までご馳走になってコールリッジの詩『老水夫行』(“The Ancient Mariner”)を朗読していたという。そこへ村からジェフリーが帰宅。ヘンリー卿の姿を見て、昨晚の背信行為をなじる。そして道徳的に不名誉な状況に夫人を立たせた以上、ヘンリー卿か自分のどちらかが、夫人に結婚を申し込まねばならない、と宣言する。固辞するヘンリー卿に、シーラは世間の評判(publicity)を理由に翻意を促す。ホップズはこの事故がまさしく興行上の宣伝(publicity)になると考え、二人が両手にサバを持っている写真を新聞社に持ち込む計画を述べる。そこへミムズが来訪。救助のためにガール・ガイドを動員したこと、人間誰しも老いるのだから老人に親切に、というホップズの昨夜の演説に感銘を受けたことを伝え、用事がないことを確認して立ち去る。漂流事故の記事が載れば告訴する、とのヘンリー卿の脅しに、ますます評判になって結構、とホップズは動じない。ウェストレイク夫人との縁はこれまで、とヘンリー卿は入浴に向かい、ジェフリーは名誉のために自分が夫人と結婚すると言い出す。そこへ着替えを終えた夫人が登場。ジェフリーは即座にプロポーズし、意外なことに夫人はそれを受け入れる。ヘンリー卿が彼女への求婚を拒否したことを知って不快感を露わにしつつも、結婚の段取りをホップズに進めるよう指示。入浴中のヘンリー卿から、夫人と二人きりで話がしたいとの伝言が届き、人払いされるが、シーラだけが残って、ジェフリーではなく、できればヘンリー卿を選んでほしいと哀願する。情にほだされた夫人は、堅物(prig)のジェフリーなど幸福にできないから、彼とは結婚しない、と答える。風呂上がりのヘンリー卿が登場。酷い目に会わせたことを詫びて許しを乞い、同情や名誉のためでなく衷心からプロポーズすると、彼女はそれを承諾する。一同を呼び戻した夫人は、ヘンリー卿から求婚があり、それを受け入れたと発表する。しかしこれには、さきほど夫人との婚約を済ませたジェフリーが当然ながら抗議する。うっかり先約を忘れて、二股膏薬の婚約をしてしまった夫人は、二重結婚は法律で禁止されているが、二重婚約は規定がない、と詭弁を弄すが、キャノンから二者択一を迫られる。憐憫の情から求婚を受けた、という夫人の一言に傷ついたヘンリー卿は求婚を撤回し、最終的にジェフリーとの婚約が有効なものとして残る。朝食の鐘が鳴り、一同は食堂へ向かう。シーラが夫人に約束が違うと詰め寄ると、午後になったら誰と婚約しているか分からないわ、と宥め、シーラと腕を組んで出ていく。

第4幕。同日の午後の庭。雑誌を読むキャノンのもとへコンスィディン夫人が近づき、息子の婚約に不満を漏らす。自動車の音がして、ウェストレイク夫人との面会に劇作家ビービーが到着し、挨拶を交わす。徹夜で漂流した夫人は現在、あいにく就寝中。「申し合わせ事項」(understanding)があ

るというビービーの言葉を、「婚約取決め」と一瞬、誤解するキャノン。出てきたホップズに対応を任せ、夫妻は座をはずす。ビービーは、例のヒヒの芝居の冒頭場面を書き上げ、リハーサル開始を望んでいるが、ウェストレイク夫人はまったく乗り気でない、とホップズは伝える。現れたジェフリーにビービーは、知よりも情に訴える作品を書けば当たる、と助言し、ホップズと立ち去る。シーラが続いて現れ、大好きだから自分と婚約してほしい、と思いのたけを素直に打ち明けるものの、ジェフリーはそれを丁重に断り、額にキスして去っていく。またしても立ち聞きしていたウェストレイク夫人は話の進め方がまずい、とたしなめる。寝不足のヘンリー卿は夫人と顔を合わせ、老人呼ばわりされて憤慨し、夫人の言い回しには正確でない点が多いと指摘、今度は逆に夫人が嘘つき呼ばわりされたと怒り出し、登場したホップズに私は嘘つきか、と尋ねるが、即座に肯定されてしまう。連れのビービーに用件を訊き、出演料の値上げを要求してホップズとともに追い払う。夫人との婚約は不適切だとヘンリー卿が考えていると教唆されたジェフリーは卿を敵視し、怒ったヘンリー卿は一人で退散する。婚約解消を求めるシーラに、ジェフリーから愛想を尽かされ、彼の自尊心を砕くようなやり方でないと効果がない、田舎生活が退屈な余り婚約をただけで、ヘンリー卿など好きではない、と夫人は答え、日傘を取ってきたジェフリーと散歩に出る。キャノン夫妻が登場。ジェフリーはビービーと相談する夫人を残して一人戻り、ビービーへの嫌悪感を表明。ビービーと夫人もお茶に戻り、夫人は好物のキュウリ・サンドを喜ぶ。ヘンリー卿もお茶に出席。夫人は妙案を思いついた、とシーラに傍白し、ビービーの〈ヒヒ男〉戯曲への出演依頼を承諾した、と公言し、ジェフリー作『ジャンヌ・ダルク』の13歳の少女はやはり自分には演じられないから採用を却下、いますぐ稽古のために帰京する、と発表する。ビービーの戯曲の代わりに自作が没になるくらいなら、ヘンリー卿を選ばれて夫人に捨てられたほうがまだ、という発言をとらえて、自作戯曲の上演日当てに婚約しただけなら、芝居が没となったいま、婚約も解消、と夫人は息巻く。さらには舟の遭難やミムズのガール・ガイドまで、ジェフリーの芝居を舞台上演させる大がかりな陰謀だったに違いない、と決めつけ、ビービーの乗用車で帰る、と荷造りに向かう。婚約解消を認めないジェフリーに、かつて自分も夫人と婚約していた、とビービーが爆弾発言。戻ってきた夫人は、食べ残しサンドをつまみつつ、大衆受けする儲かる芝居を書くようにジェフリーに勧め、有名でも金のない暮らしは嫌、ビービーとは数年後に結婚するかもしれないし、ヘンリー卿も捨て難い、などと浮気女を装うので、さすがのジェフリーも夫人を見限って、立ち去る。シーラは自分のせいでジェフリーの戯曲が却下されるのは耐えられず、ヘンリー卿や夫人に助力を願い出たことを打ち明ける。すると夫人はみなを集めて、ジェフリーの戯曲は却下ではなく上演延期であり、シーラとジェフリーの結婚祝いの贈物として上演するし、婚姻届と上演契約書は同日に署名してもらおう、と発表する。荷物をまとめたホップズとビービーが車の準備に行く。一同は別れの挨拶を夫人たちと交わし、一行の乗った車は帰路に着く。ヘンリー卿は睡眠をとりに行き、シーラはジェフリーの出かけた入会地へ向かう。ようやく騒ぎは収まり、キャノンはトーストに蜂蜜を塗ってくれるように妻に頼む。

つねに人々の注目と賞賛を浴びずにはいられないわがまま女優の気紛れ・移り気に翻弄される男たちをコミカルに描いた作品で、劇団の一行が平穏な町の人々の心に混乱を引き起こすという主題は、アーヴィンの後任のアビー劇場支配人となったロビンソン(Lennox Robinson, 1886-1958)の『イニシでのドラマ』(*Drama at Inish*, 1933)で引き継がれている。

⑤『アンソニーとアナ』(Anthony and Anna) 3幕

1926年3月9日、リヴァプールのプレイハウス(Playhouse)——収容規模は762席(1983年時点)——で初演。演出はアームストロング(William Armstrong)。なお、改版<sup>11)</sup>の初演は1935年11月8日、ロンドンのホワイトホール劇場(Whitehall Theatre)——604席(同)——で、アイリーン・ヘンチェル(Irene Hentschel)演出。献辞も彼女に捧げられている。ロンドンでは2年以上も公演が続く人気を博した<sup>12)</sup>。

第1幕。7月のある水曜日の昼食前、旅館〈聖ペテロの指〉亭(Inn of St. Peter's Finger)の喫茶室。張出し窓から通りを眺めている若い給仕フレッド(Fred)を、この旅館の経営者兼給仕頭のジョージ(George Hoskins)が注意する。新聞社を3社も所有する60歳前後のアメリカ人富豪ジェイコブ・ペン(Jacob Penn)と娘のアナ(Anna Penn)だけが泊まり客で、まずジェイコブが外出から戻り、ディケンズの時代と違って昨夜の夕食、とくにキャベツはふやけてまずくて胃がもたれる、と苦情を伝えて部屋に戻る。続いて、有名な大衆小説家ダンウッドディ(Hubert Dunwoody)が入室、36歳くらいで肥満気味の成金(one of the Noo Rich)。ペン父娘が宿泊していることを確認すると、自分も昼食と宿泊を申し出る。昨今では、食料持ち込みでトイレを拝借するだけの大型観光バスの客と徒歩旅行者(char-a-bangs an' 'ikers)の休憩所同然になり、「民主主義」(De-mock-er-a-cy)のお陰でチップも減って、まるで貧民救済吏(relieving officer)のようだ、とジョージは彼に嘆く。続いて、30歳くらいのリュックを背負ったアンソニー(Anthony Fair)が登場、ジョージに昼食を注文。ダンウッドディは自分の滞在をペン父娘には内密にするようにジョージに命じるが、彼はダンウッドディが著名作家とは知らず、自分から仕入れた話をネタに本を書いて一儲けしてるのに御礼もない、と作家たちに不満を漏らす。アンソニーは滞在客のアナが独身で可愛いか、とジョージに質問する。元気潑刺たる女性で、英国人執事としてアメリカで通用するにはコックニー発音では駄目、[h]音を落とさぬように、と注意されている、と彼は答える。ジェイコブ・ペンが降りてきて、変わりやすい英国の天気の話でアンソニーと交わり、アナはまだ戻っていないと知ると、再び自室に下がる。やがて、24歳の美女アナが、ドアではなく窓越しに入ろうとして転びかけたのをアンソニーが抱きとめる。彼女はこの客の名前を知りたがり、ジョージは宿泊名簿への署名を促すが、やりとりが聞こえていた彼は自ら氏名を名乗り、アナをじっと見つめる。アナの煙草にすかさず火をつけた彼は、煙草の吸いすぎで指が黄色くニコチンだらけ、とずけずけと指摘してアナの不興を買い、彼女は退室。昼食の支度が完了したことを告げるゴングをフレッドが鳴らし、ダンウッドディ、続いてペン父娘が降りてくる。ダンウッドディは偶然に出会った風を装い、ロンドンの喧騒を抜け出して小説の仕上げに来ている、と嘘をつく。アナはダンウッドディに同じテーブルに相席を勧め、アンソニーはひとり隣席につく。朝粥にベーコン・エッグ、昼はロースト・ビーフ攻めの英国料理、オムレツ攻めのフランス料理に代表される単調で退廃的な(effete)ヨーロッパ文明は、朝食のシリアルだけでも37種類から選ばねばならない多様なアメリカと比べると、かえって気楽で落ち着くわ、と欧州7か国を9週間(うちスイスは2時間)旅行しただけのアナは自慢げに語る。10年来の慢性神経性消化不良(nervous dyspepsia)に悩むジェイコブは、消化を助ける「木炭入りビスケット」(charcoal biscuit)にミネラル・ウォーター<sup>13)</sup>(Vittel)の昼食である。隣席からときおり半畳をいれるアンソニーに業を煮やしたアナは、父親とダンウッドディを正式に紹介して、自分たちのテーブルに座るように誘い、彼は応じる。固い物を食べると胃が痛むと持病の話をして返し返すジェイコブに、かつてグラッドストーン

首相は30回は咀嚼したと新聞記事の受け売りをダンウッドィが語ると、もちろん自分もよく噛み、様々な薬や食品を試したが、結局はライバル会社の考案した「木炭入りビスケット」に落ち着いた、もとはといえば、食事の時間も惜しむ仕事の虫で、アメリカ流の缶詰食品の早食いと運動不足が祟ったのだが、日増しに金と権力が増えていったのだから仕方ない、と語る。アナから職業を聞かれたアンソニーは、adventurer（「冒険家」という一般的な意味のほか、「(市場の)投機師・相場師」,「(政界や社交界の)山師・策士」,「遊び人」などの特殊な意味がある）と答え、「巧妙に一時しのぎして暮らしている」(I live with my wits.)けれど、収入はかなり変動する、と曖昧に切り出した後、労働はアダムとイブの原罪の罰として生まれたもので、自分はいくせく働くのは大嫌いだ、と宣言する。労働は人間の偉大な遺産であり、最大の特権である、とジェイコブは反論する。アナはアンソニーにそれじゃあなたは「いかさま師」(crook)なの、単刀直入に切り込み、アンソニーはある意味ではそうだと口を濁す。オックスフォード大学卒業後、転がり込んだ叔母の遺産1500ポンドを僅か1年半で使い果たし、「世界一怠惰な仕事」の自動車販売業についたが、自動車を買う連中に嫌気が差して離職し、ゴシップ記事を書いて友人を裏切る気にもなれず…と話を進めたところに、アナが口を挟む。アンソニーはこの横槍をたしなめ、アナが女性に向かって無礼な振る舞いだと反発すると、娘さんはしゃべりすぎだと応酬し、コーヒーは一人で庭で飲む、と席を立つ。(立ち去り際に、消化不良を直す妙薬として水泳や散策を勧め、明朝から同伴して指導する、とジェイコブに申し出て、彼は承諾する。)ダンウッドィは、アンソニーとの接触を避けて無視するようにアナに忠告するが、アナは黄色いニコチン指の台詞を引き合いに出して、侮辱の復讐に燃え、コーヒーを彼のズボンにこぼしてくれたら嬉しい、とジョージに頼む始末。一方、三文文士たちと交際するようになって煙草を覚えた娘を快く思わないジェイコブは、女性たちがカクテル片手に紫煙をくゆらせる風潮を嘆く。庭から戻ってきたアンソニーが、軽石(pumice-stone)で擦すればニコチンは落ちるかしら、とジョージに訊くアナの声を聞きつけ、そのうちにね、と口を挟んだのにアナはまたしても腹を立て、ダンウッドィを雨模様の中、散歩に誘い、レインコートを携行するように頼むと、ゴム長靴(goloshes)も必要だ、とアンソニーは世話を焼く。アナはダンウッドィと退室。ジェイコブは休憩に下がり、アンソニーはジョージに女性を口説くには優しく下手に出るべきか、大胆かつ攻撃的に(truculent)に出るべきか、と尋ねる。〈ベルベットの手袋をはめた鉄の手〉と〈一にも二にも押しの一〉(l'audassy, l'audassy, toojours [sic] l'audassy)の二通りだと彼は答える。アンソニーは宿泊者名簿を受け取り、いつまでかは分からないが宿泊する、告げる。

第2幕。同じ旅館の公共の居間。雨の日曜の午後、お茶の時間ごろ。アンソニーとの長時間の散歩に出ていたジェイコブが疲れて帰ってくる。アンソニーはお茶や酒でなく、冷たい水を今後とも飲むように勧め、自室へ去る。登場したダンウッドィ相手にジェイコブは英米比較文化論めいた感想を述べる。曰く、アメリカは金を稼ぐところでイギリスは使うところ、アメリカ人には平等はあるが自由がなく、イギリス人はその逆だ、アメリカに封建制度を導入すべきだ、等々。運動で健康を回復したジェイコブは、まだ話し足りないばかりにダンウッドィを部屋へ誘う。残されたジョージとフレッドは、サヴォイ・ホテルと比較しては、請求書を精査して高額だと不平をもらすダンウッドィを、「偽善的」(ypocritical)で、いわゆる「両生類みたいな」(Sort of what you'd call amphibious)な奴だ、「肉1ポンドを要求する」(『ベニスの商人』シャイロックを描いた)「正真正銘のシェイクスピア」(Reg'lar Shakespeare)だ、と陰口をたたく。ジェイコブとダンウッドィを避けるようにアナが降りてくる。気を利かせたジョージがアンソニーを呼びに行こうとすると、当のアンソニーが登場。当惑するアンに、アンソニーは殺人事件が掲載された新聞を勧めるが、アナは長距離散歩で父親を疲れさせて部屋に閉じこもらせ私と話す機会を得ようという魂胆でしょう、と非難する。アンソニー



は、ダンウッドィと結婚するのか、と尋ね、自分もアナと結婚したいのだ、と告白する。アナは驚愕して、会ってまだ3日<sup>14)</sup>しか経たないのに、気が触れている (goofy/dippy) と叫ぶが、窓から入ってきて抱きかかえたときに一目惚れしたのだと説明、鼻のゴミをハンカチで拭いてあげたり、君の方も僕を愛しているはずだ、嘘はつかないで正直になれ、と迫るアンソニーに、さすがのアナも折れて、彼に抱きつきキスをする。しかしながら、素性をよく知らない人とは結婚できない、と躊躇する彼女に、自分の出来ないことを登場人物に託すのがダンウッドィに代表される小説家連中で、彼とは結婚してはいけない、僕を選んだ、自分の職業については君が話の骨を折ったじゃないか、と弁明する。そこへジェイコブとダンウッドィが登場。二人は合衆国憲法と政府、国際情勢における米国の役割について議論していたのだが、アンソニーから求婚されたアナが暴露し、拒絶されたが10月末には結婚したい、と主張するアンソニーに、二人は当惑を隠せない。アンソニーは自分の生業<sup>なりわい</sup>についての説明を始める。自分は人から好かれる魅力的な性格で、よくパーティに招待されるものの、出席すると交通費や使用人への心付けなどでかえって出費が高むことに気がついたこと、人々の心を明るくしてみなの役に立ち、「幸福を生み出している」(I manufacture felicity.) のに、仕事嫌いというだけで犯罪者・やくざ者 (waster) 扱いされるのは不当である、と訴える。そして、この魅力ある恩恵の代価として、昼食会出席は3ギニー、夕食会は5ギニー、週末滞在は短期10ギニー、長期15ギニーで一等車両の往復交通費と心付け費用付き、といった料金表に従って報酬を得ていたこと、娯楽活動を職業とするのは本意だが、本来ならば巨額の定収入を保証されるべき価値がある、と主張する。しかしながら、ジェイコブは、労働は高貴な制度であるという確信を変えず、働かない男と娘の結婚は認めないと断言する。これに勢いを得たダンウッドィは、自分も偶然の邂逅と嘘をついたけれども、以前から好きだったアナにプロポーズする。アンソニーは妻を扶養できる定収入がある男が妻を幸福にできるとは限らないし、幸・不幸は運次第で誰にも保証はできない、と反論、アナが7歳のときに妻と離婚したジェイコブはこの考えに一理を認めはするが、持説は曲げない。アンソニーも、労働が好きな人もいれば、嫌いな人もいる(大部分の人間は労働は嫌いだが、妥協して働いている)、嫌いな人々の中には不幸な貴族階級・有閑階級と呼ぶべき浮浪者たちと、芸術や文学、趣味やスタイル、優雅さなどの文明社会の基礎を作り、他の人々の労働に依存して生きる、自分が属する範疇の人々があり、たとえ愛する女性のためでも、この原理原則は譲れない、と固執する。アナはアンソニーの求婚を受入れ、ダンウッドィは諦めて立ち去る。そこへ自動車の到着音がして、34歳ほどのスピードウェル卿夫人のシンシア (Lady Cynthia Speedwell) が登場。シンシアはアナの旧友であるが、同時にアンソニーの幼馴染みの従兄弟でもあり、お互いに恋愛感情も資金もなかったから婚約しなかった、と語る。彼女がオーストラリア人の富豪ジェイムズ (James Jago) と婚約したばかりだと聞いて、アンソニーは急にその場を中座する。遅れて、そのジェイムズが登場し、挨拶を交わす。ジェイムズはシンシアの公爵令嬢の肩書きと貴族階級の伝統に、シンシアはジェイムズの年収3万ポンドやロールス・ロイスに惹かれ、互いの利害が一致した、納得づくの婚約であった。お茶の時間となり、席を外していたダンウッドィも呼び戻され、観念したのかアンソニーも戻り、ジェイムズと対面する。ジェイムズは相手の顔を見るなり、1か月半前に、トランプでいかさま賭博をしたから家から追い出した、と爆弾発言する。しかし、アンソニーはいかさまはやっていない、否定しなかったのはいかさま賭博師と自分をみなすような連中と関わった自業自得、中座したのは釈明に窮する立場を避けたかったからにすぎない、自分にその技量があるか試すために1度だけ故意にいかさまをして7ペンス儲けようとしたことがあるが、すぐに見破られ、自分には無理だと悟った、と淡々と語る。チェスのチェッカー遊びで自分もずるをしたことがあるジェイコブだが、ギャンブルで生計を立てる男との結婚は許さないと断言し、アナが貧乏娘でも結婚したいか、とアンソニーに問い質す。

これに対してアンソニーは貧乏なら結婚しない、と答えて一同を驚かせる。彼によれば、収入不安定で自活が精一杯の自分はアナを養えないからだ、と説明し、アナはこれを理解するが、ジェイコブは得心がいかない。一方、アナはたとえ父親から勘当され一切の援助を絶たれてもアンソニーとの結婚を望む、と断言するが、アンソニーがこれを押しとどめ、自分は金が目当てだと語るのを聞くと、彼に平手打ちを食わせ、泣きじゃくって部屋から飛び出していく。娘の愛の深さを悟ったジェイコブは、就職を条件に資金提供を申し出るが、働かないという自分の信念は譲らない、として彼は去っていく。口の達者な奴だ、とジェイコブは思わずもらす。

第3幕。3時間後の同じ場面。不言実行をモットーとするジェイムズが珍しく一人で長広舌を振っていた模様で、アンソニーの取ったアナへの態度はよくない、男性は女性に対してはしかるべく接するべきで、いくら男女平等と言っても総合的には男性のほうが優れていることは自明であり、自分より高みにある女性、自分にはない素敵なるものを人生にもたらす女性に巡り合うまでは関わりを持たなかった、女性は男性の望む通りの姿でいてほしい、と演説する。他方、シンシアは、夫には野心、勇気、擲猛さ、献身のほかに、嗜み (graces of life) も要求するとして、洗練された教養の陶冶には時間がかかる、と答える。降りてきたジェイコブは、アナが口を利いてくれない、アンソニーのお陰で健康にはなったが、どうして分別ある行動がとれないのか、と嘆く。シンシアは、能率万能の時世には反面教師の意味でも、(自分も含めて) 怠け者の役立たずがいてもいい、と擁護する。次いでアナが登場。彼女を慰めるつもりでジェイムズが発した台詞——紳士たる者は女性を敬意と、「忍耐を持って」扱うべきだ——は、まるで女性を甘やかされた子ども扱い、ばか (nit-wit/loopy) 扱いする侮辱的発言だと憤慨し、また自室へ戻る。奇妙なことに、アンソニーが場にはいないだけでみな気持ちは荒んでいくようだ、女というのは分からない問題だ (tough propositions) と、ジェイコブもジェイムズと連れ立って出ていく。宿泊客が出払った舞台上、フレッドとジョージが登場し、二人も口論を始める。ジョージの横柄な口振りに日頃から不満を抱いていたフレッドは、ジョージは時代遅れの人間であり、自分なら〈聖ペテロの指〉亭のような、救世軍施設の響きの名称はカールトン・ホテルに改め、ムード歌唱 (crooners) や舞踏会 (tea dance) の催しを入れる、と提言、これにはジョージは猛反対、フレッドは仕事をやめて (downed tools) 実家に帰る、とまで言い出す。姿を現したアンソニーは仲裁に入り、まずフレッドにナイフ磨きを命じ、ジョージにも辛く当たらぬように忠告する。ジョージは、アナがダンウッドを意のままに操っていて ('ave 'im fairly on toast)、二人が結婚すれば自分の言いなりに従う夫をアナは嫌うだろう、昔はタクシーに女性が乗ることは不作法とされたのに、いまではタクシーの運転までしている、と女性の社会進出を嘆く。フレッドはアナとの結婚問題でとるべき道をジョージに尋ね、原則に拘泥せずにアナとの結婚の道を彼は勧める。シンシアとジェイムズが降りてきて、アンソニーがシンシアの従兄弟に当たる血筋であるなら、いかさま賭博をしても目くじらを立てない、といかさま疑惑の件で和解する。そこへアナも降りてきて、シンシアとジェイムズは座を外す。アナは自分の持つ魅力のなかで金が一番大事だと思うかと尋ね、アンソニーは否定するが、金はやはり大事だと答える。男の自分は、人生の苦楽を平然と受け止める (take the rough with the smooth) 術を心得ているが、安楽と安全、安定志向の女は人生の波風を本能的に嫌い、金のない結婚生活は悲惨なものになる、と結婚に踏み切れない理由を語る。そこへジョージが一通の電報をアンソニーに届ける。ワイト島のランコーン卿夫人邸で開催される2週間のパーティへの招聘状で、久しぶりの接待の仕事に彼は喜び、明朝の始発列車で向かう旨の返信をジョージに託す。これでお別れだ、と切り出すアンソニーに、自分から求愛しながら一方的に別れを告げる真似は許さない、とアナの怒りは爆発する。彼女は配達少年から返信文を取り返すようにジョージに命じ、「近日結婚につき、遺憾ながらご招待を辞退」と書き替え、この知らせをみなに伝えるよう

にジョージに告げる。しかし、アンソニーは返信文を破り捨て、返信なしと配達人に連絡するように指示する。結婚こそが本当の冒険であり、自分は一文無しでも一か八か挑戦するつもりだとアナは訴えるが、もしこのまま別れてしまうのなら、せめて年老いたときの思い出にと、しばらくの間、アンソニーに抱擁してもらおうが、やがて耐えきれず泣き出す。ダンウッドディと結婚すれば、とアンソニーは口走り、すぐにそれはやめた方がいい、喧嘩ばかりの生活 (a cat-and-dog life) になるとジョージも言っていた、と口を滑らせる。アナはジョージを呼んで真意を確かめ、アナとアンソニーは似合いのカップルである、と聞いて喜ぶ。ジョージは自分なら嫁入り道具 (trousseau) を支度し、明朝 (10時が最適)、教区牧師を訪ねて次の日曜に初回の結婚予告<sup>15)</sup> (banns) を出して貰い、この旅館で結婚披露会 (wedding-breakfast) を催しては、と早く結婚をするようにアナを促し、調理場へ去る。無一文の自分には結婚は無理だと言うアンソニーに、夫の仕事に関心を持つのは妻の務め、とアナ。やがて、結婚話を聞いたジェイコブが駆け込んでくるが、労働拒否の原則をアンソニーが曲げないと聞くと、明朝一番の船でアメリカに帰国する、と言い出し、アンソニーも明朝出発の意向を告げる。もともと労働に不向きで働く能力のない人のように思える、というアナの言葉に、やる気になればこの旅館にいる誰よりもよく働ける、とアンソニーは異論を唱える。ジェイコブは自分の事業を任せてもよい、とまで譲歩するが、アナは破産させるのが関の山だと一蹴し、ジョージを呼んで、この旅館を自分に売却してほしい、と依頼して一同を仰天させる。彼女にはなぜだかこの旅館を購入するだけの蓄えがあり、この旅館を住居に定め、アンソニーは来客の接待、ジョージはこれまで通りに執事として勤務するという条件で、ジョージはこれを承諾する。さらにアナは、自分の話を文章にまとめてアメリカの新聞社に持ち込めば、「富豪令嬢、恋ゆえに財産を放棄」といった面白い記事が写真入りで掲載されるかも、とジェイコブに脅しをかける。そしてアンソニーに席を外させて、結婚したら彼にはちゃんと働かせる、とジェイコブに約束する。彼なしでは生きられない、と娘が言うので決心を変えた、とジェイコブは嘘を伝え、二人の結婚を承認する。アナはジェイコブを部屋へ見送り、アンソニーは彼女を強く抱き締めてキスする。抱擁のなか、昼食を告げるゴングをジョージが鳴らす。

アンソニーの労働忌避の信念は解釈の別れるところであろう。有名大学卒業後、遺産を使い果たし、自動車セールスの営業も顧客が気に入らずに退職し、人好きのする性格を頼りにフリーランスの接客業で食いつないでいく人生を送ってきた彼は、地道に汗水垂らして毎日労働することを嫌悪している。誰からも愛される人柄のよさという個人的魅力を武器に社交界に寄宿していく生き方は、厳粛な勤労観を持つ人々の批判的になるだろう。一方で、彼の果たすホスト的な役割、周囲の人々の心をなごませ、癒しとなる役割は、ジェイコブの否定にも関わらず、それはそれで一種の職業として、こんにち認知されうる性質のものに思われる。演技力も歌唱力もないが、見ているだけで安心感を与えるタレント芸能人のように、この旅館の名物経営者として来客を虜にするかも知れない。リュックを背負った徒歩旅行者として1幕で登場し、2幕では16キロの散歩にジェイコブを連れ出す健脚家の彼は、決して無為に体を持て余す〈三年寝太郎〉でも、理念に肉体が及ばない〈オブローモフ〉でもない。彼がアナとの結婚に躊躇する理由として、不安定な収入による家庭不和を挙げているのも、あ

ながち言い逃れでもなく、アナへの良心的配慮であるとも言える。

だが、この作品でもっとも見所なのは、やはりアナと彼女が3幕で見せる決断力と思慮である。ひとたび愛に目覚めた彼女は、持ち前の強靱な精神力でアンソニーや父親を毅然と指揮し、自分の人生を切り開いていく。彼女が無一文の窮乏生活に本当に耐えられるのかは疑問だが、その意気込みや覚悟があるだけでも評価すべきである。ごろつき呼ばわりされたジョージが、自分は〈デウス・エクス・マキナ<sup>16)</sup>〉(*deus ex machina*, 80)だと自認する場面がある。古代演劇で急場の解決に登場する宙乗りの神、から転じて、戯曲の困難な場面で突如現れて、不自然かつ強引な解決をもたらす人物や事件を表す演劇用語だが、旅館売却交渉に応じるジョージよりも、旅館購買そのものを思いついたアナの途方もない発想の方こそ、この用語に当てはまるように思われる。

なお、一途な女性(アナ)から逃げようとする男性(アンソニー)という構図は、アーヴィンが敬愛するショー(George Bernard Shaw, 1856-1950)の『人と超人』(*Man and Superman*, 1905)のアン(Ann)とタナー(Jack Tanner)を連想させるだろう。アンソニーが給仕頭ジョージをウィリアムと間違えて呼び(p.17,20)、ウィリアムという名前の給仕を思い出したから、と弁明するのは、やはりショーの『分からぬものですよ』(*You Never Can Tell*, 1899)に登場する如才のない給仕Williamを念頭に置いていると思われる。

こんにちの人権意識からすると配慮を欠いた台詞<sup>17)</sup>があるが、これは戦間期の作品という時代の制約からやむを得ないだろう。

## ⑥『ジョージ爺さんがお茶に来る』(*Ole George Comes to Tea*) 1幕

1927年5月27日、『アンソニーとアナ』と同じリヴァプールのプレイハウスにて、同じくアームストロングの演出で初演。

舞台設定は、現代の7月の土曜午後の、ロンドン、ウォルワース・ロード(Walworth Road)近くの労働者の自宅居間。21歳で細身の美人アグネス・パーソンズ(Mrs. Agnes Parsons)は料理中。24歳の夫エンリー(Mr. 'Enery Parsons)が帰宅し、妻に抱きつきキスするが、アグネスは涙顔で不機嫌そう。いつもと違って料理もできていないうえ、彼の嫌いなハヤシ肉料理('ash)と知って、豚の餌('Ogwash)呼ばわりする。洗顔を済ませて食卓につくが、妻の方は少しも食欲がないと言う。近所の嫌な奴のせいなのか、薬代わりにウィスキーでも買いに行こうかと、エンリーは心配する。結婚以来欠かしたことの無い、土曜午後の公園への夫婦での散歩も取りやめて横になりたい、とアグネス。そこへノックがあり、訪ねてきたのは職場の上司のジョージ爺さんだった。頭痛がして寝室に下がろうとするアグネスに、ちょっと土曜に寄ってくれと声をかけられたもんだから、という話

をくどくどとジョージは繰り返す。ようやく彼女が寝室に退散できたあと、酒を頼むジョージに、妻のために禁酒したからわが家には水しかない、とエンリー。結婚制度は是認するが、結婚生活（‘matterimony’[sic]）では夫が家長であらねばならんのに、もう尻に敷かれている、などと年長者らしく説教をする。妻のために休暇旅行をすべきだろうか、とエンリーが尋ねると、気分転換目的に観光地で海水浴だのは下らんことだ、と一蹴し、鼻歌を歌い出す。寝室のアグネスからノックがあってエンリーが呼ばれ、アグネスがうるさかっていると伝え、まだ泣いているので、と彼は寝室に戻る。その間、ジョージは勝手にお茶の準備に取りかかり、バター・トースト（Buttud toce [sic]）まで拵える。戻ってきたエンリーは親しき仲にも礼儀あり、とジョージの無作法を非難するが、逆にジョージは、なんにも分かっていない奴だ、お前は国家の義務を果たすんだ、つまり父親になるんだ、とエンリーに諭す。わしの女房は6人目を出産して亡くなったが、子どもが増えるたびに自分は泣いたもんだ、さあ奥さんに優しい言葉をかけてやれ、と促し、もう長居は無用、とこっそり部屋を出て行く。

全編が強烈なコックニー訛の英語文体で書かれたこの作品は、無骨だが人情味あふれる労働者階級の会話をいきいきと伝えている。新婚の若夫婦の暮らしぶりを探りに訪れた職場の上司の老人が、長い人生経験から察するように、エンリーは勿論のこと、アグネス自身も気づいていないけれど、実際に懐妊したのかもしれない。兆候として分かりやすい、悪阻の吐き気ではなく、頭痛と食欲不振の症状しか訴えてはいないが、大いにその可能性はあるだろう。老人の智恵と若者の無知が対比的に描かれ、こっそりとお暇するジョージの姿は、未来のある若者たちが生きるこの世から静かに姿を消していく老人という、世代交代の象徴であるかもしれない。

### ⑦『彼女はまったく淑女でなかった』（*She Was No Lady*）2場

1927年9月27日、『ジョージ爺さんがお茶に来る』と同様に、リヴァプールのプレイハウスで、アームストロング演出で初演。

第1場。パーク・レインにあるアルフレッド・ピクルズ卿（Sir Alfred Pickles）の豪邸の書斎。そうした大邸宅は清掃が大変だと購入反対の妻を、召使を大勢雇うから管理の心配は無用、とピクルズ卿は請け合って説得した。この豪華な書斎で、56歳の卿は苛々しながら歩き回っている。電話が鳴り、来客を通した後は誰も入れぬように指示し、妻の写真を眺めて溜め息を漏らし、「30年も経って！」と呟く。訪問客は私立探偵リアマウス（Mr. Henry Learmouth）で、彼は早速、依頼されていたピクルズ夫人（Lady Maggie Pickles）の謎めいた素行調査結果を報告する。夫人は毎週月曜と金曜の午後3時半に、賃貸あるいは購入住居人が決まるまでの空き家を訪ね、第1週はアパー・ブルック通り、第2、3週はヘイ・ヒル、そして最近の第4週にはごく近隣のディーナリー通りの空き家へと、行く先を変えている。室内での行動内容は不詳だが、同一の女性管理人がどの空き家にもいて、探偵の行動を監視している。ピクルズ卿は妻の不審行動を嘆き、10年前にはイングランド北部の小都市ハダーズフィールド（Huddersfield）近郊に住む貧乏人だった自分が、別荘や森林を所有する

大富豪にして国会議員に登りつめ、称号K.B.E.<sup>18)</sup>を得たのも、ひとえに愛する妻を喜ばしうがためだったのに、その妻が虚偽の説明——月曜にはハイド・パーク、金曜にはオリムピアの理想家庭展示会に出かけた——をしていた、と当惑する。そこへ当の夫人が外出着で現れ、銀行預金を下ろし忘れたので数ポンド用立てしてほしい、と夫に依頼する。夫人はまたもハイド・パーク散歩という口実を使い、夫の同伴の申出も断って、お茶の時刻を過ぎたころ帰宅予定、と言って出ていく。毛皮や宝石、車、豪邸など何でも妻が欲しがるものは与えたのに何が不足なんだ、とピクルス卿は顔を覆う。行き先を把握している二人は時間の余裕をみて、まず探偵が呼鈴をならして隠れ、ピクルス卿が即時の臨検許可 (order to view) を持っていることを嘘をついて、空き家に踏み込む計画を練る。もし若造と一緒に現場を取り押さえたならただではおかない、とピクルス卿は憤然とし、探偵と共に彼女の後を追う。

第2場。ディーナリー通りの空き部屋。管理人のグレイヴニー (Mrs. Ellen Graveney) がピクルス夫人を案内。最近嗅ぎまわっている、うさん臭い男を叱りとばしてやった、と管理人。夫人は控えの間に入って外鍵をかけさせ、家庭や夫でも満足させられない、ある営みを始める。そこへドアの呼鈴がなるが、窓から人影は見えない。3度目の呼鈴でグレイヴニーが応対に出ると、悶着の声のあと、ピクルス卿が部屋に踏み込み、探偵と管理人も続く。妻の所在を質すピクルス卿に、誰もいないとしらを切る管理人は、夫人の脱いだ上着や帽子を指摘されると、返答を拒否する。控えの間を家宅調査しようとするピクルス卿の前に彼女は立ちはだかるが、押し退けられる。ドアが施錠されていると分かったら、ピクルス卿は大声で妻の名を連呼。夫の来訪に気づいた夫人の許可を得て、管理人が鍵を開けると、中からは、袖を捲り上げ、右手にブラシを持った夫人が労働者階級の服装で出てくる。彼女の説明によれば、自宅では大勢の召使のいる手前、床磨き掃除などできないが、偶然幼馴染みのエレンに会って、貧乏だったハダースフィールド時代のように掃除や洗濯、パン作りの家事をするために週2回ここへお忍びで来ているのだ、という。貴婦人のような暮らしは性に合わないし、言葉遣いも違い、よそよそしい社交界の人々との交際は牢屋暮らしだから、せめて自分だけでもハダースフィールドに戻り、週末に夫が訪ねてくれば、と提案する。居場所を突き止めるのに探偵を雇ったことを憤慨しながらも、夫が自分の浮気を心配したためと知って納得し、最後には自宅豪邸に戻る決意を固める。しかし同時に、自宅近辺に別宅を購入して、エレンに管理させ、自分の労働本能が疼いたときに掃除や洗濯をして、またハダースフィールド気分になりたい、と要望することを忘れない。

ありえなさそうで、案外ありえるかな、と思わせる話。ともに労働者階級出身夫婦で、夫は上流階級に融和しようと努めるが、馴染めない妻はわざわざ部屋を借りてまで家事などの肉体労働に励む。召使任せの怠惰な暮らしに順応せず、自律的生活を送ろうとする妻の姿勢は、ある意味では健全である。

### ⑧『最初のフレイザー夫人』(The First Mrs. Fraser) 3幕

初演は1929年7月2日、ロンドン、ヘイマーケットのシアター・ロイヤル (Theatre Royal) ——収容規模900席。劇中のジャネットの台詞に「ヘイマーケットの新作はとても評判がいいらしいわ」(45)があり、観客席から笑いをとっている。ブラウン(W. Graham Browne)演出。献辞がこの演出家に、主題の構想提示がアーヴィンの妻によ

ってなされたことが記されている。なお、アーヴィンは、脱稿から出版までの過程が短い小説と違って、執筆が完成してもなかなか上演にこぎつけない戯曲の例として、自著『戯曲作法』のなかでこの作品を挙げている<sup>19)</sup>。また、1931年には小説化されて刊行されている<sup>20)</sup>。

第1幕。ナイツブリッジ (Knightsbridge) にあるジャネット・フレイザー (Janet Fraser) のアパート。午後4時すぎ。フレイザー家の次男で、オックスフォード大学最終学年のニニアン<sup>21)</sup> (Ninian) が居間で読書をしていると、55歳の「父親」ジェイムズ (James Fraser) がジャネットに会いに来訪。ニニアンが驚いたのも無理はなく、20年間も連れ添ったのち、夫婦は5年前に離婚が成立して、いまではジェイムズは若い24歳の新妻エルスイ<sup>22)</sup> (Elsie) と生活していたからである。父親の裏切りを嫌悪するニニアンは反抗的態度を示し、多くの作家がそうであるように、卒業後はまず弁護士の道を目指して、挫折してから文学の道を歩む、などと屈折した進路希望を語る。そこへ55歳くらいの洒落た独身男フィリップ (Philip Logan) が来訪。夫婦の離婚相談にも預かった彼がジャネットに好意を寄せていることを知っているジェイムズは不快感をあらわにする。やがて48歳の魅力的な女性ジャネットが帰宅し、フィリップを中座させ、ジェイムズの用件を聞く。ジェイムズの相談とは、実は再婚した妻エルスイが、バリミーナ侯爵 (Marquis of Ballymena) の28歳の息子で、財産はあるが無知なラーン卿 (Lord Larne) との結婚を望んでおり、離婚手当 (alimony) を貰う形で自分と離婚したいと言い出したのだが、離婚歴は褒章権の喪失など社会的不利益が多いうえ、2度も自分が被告の立場で離婚すれば世間の笑い者になるから、絶対に離婚したくない、どうすればよいだろうか、という虫のいい相談だった。ちょうど暇際に、フレイザー家の長男夫婦——24歳のマード (Murdo Fraser) と23歳のアリス (Alice Fraser) ——も訪ねてきて、ジェイムズは困惑顔で退出する。長男夫婦の来訪の理由は、まさしくエルスイの悪い噂を知らせるためだったが、お相手はラーン卿ではなく、ラテン系のクラブ・ダンサー、マリオ (Mario) という男だった。彼の出演するボンド通りの「ハーフンハーフ」 (Half-and-Half) というクラブのホステスからの情報として、エルスイはマリオの最新の恋人だという。マードは離婚した両親がもう一度、よりを戻すことを願っているが、ジャネットは離婚成立までの過程で、国王代訴人 (King's Proctor) から不倫疑惑で召喚され、犯罪者扱いを受けた辛さを語る。そこへ来訪したのは、まさしく話題のエルスイで、ジャネットとの個人的会見を望んでいるため、子どもたちは席を外す。年齢も趣味も違うジェイムズを幸福にできないから、彼のために離婚したい、ついては前妻のジャネットから口添えしてほしい、とエルスイは切り出す。ラーン卿の爵位と財産に目が眩んだ身勝手な申し出に業を煮やしたジャネットは、離婚したいのなら愛人とホテルに行けばよい、と一蹴し、二人は決別する。

第2幕。2週間後の午後、同じくジャネットの居間。ふたたびジェイムズが訪ねてくるが、ジャネットは留守。しばらく待つうちに、またしてもフィリップが登場。自分はジャネットと結婚するつもりだから、ここへみだりに出入りしないでくれ、と戦線布告するが、緊急の用事だとジェイムズが答えるので、女中のメイブル (Mabel) に伝言——今夜の観劇と夕食の誘いに6時45分に迎えに来る——を残して去る。ジェイムズはその伝言は自分が直接伝えるから、とメイブルを制する。ようやくジャネットが帰宅。ジェイムズは逆に自分から今夜の観劇と夕食にジャネットを誘い、もしフィリップから同じ誘いを受けたら自分が先約だから断るよう念を押す。そして離婚問題に関しては、恩知らずのエルスイに自分から認める気はない、若い女性と一緒にいると若返った気がして若者のダンスを真似たりもしたが、若作りしても所詮は年寄りの冷や水で、無駄なことだと悟った、と語る。ジャネ

ットは、離婚当初は未練があったが、いまでは落ち着いて逆に幸福感を味わっている、骨董品を愛できるように、人間も老成した魅力が深い皺や柔らかな物腰に宿るのだ、と応じる。6時半に迎えにくることを約束してジェイムズは辞去。直後にフィリップから電話が入り、ジェイムズが策を弄して先手を打ったのを知る。ニニアンが帰宅。続いてあわててフィリップが事情説明に来るが、別れた夫と会食するのたまにはいいから、とフィリップとのデートは別の機会に譲る。落胆して新聞を手にしたフィリップの目に、マリオの写真つきの記事が飛び込む。それを見た彼は自分が宿泊した宿に深夜、マリオがエルスイと思しき女性連れでチェック・インする現場を目撃し、カップルは早朝チェック・アウト、宿泊者名簿には「ホプキンソン夫妻」と記していた、という。フィリップの暇際に、エルスイの訪問が告げられ、ジャネットは彼に、目撃した連れの女性がエルスイかどうか、こっそりと首実験での確認を依頼する。エルスイが登場。フィリップの確認結果のメモが女中によって届けられ、ジャネットは目を通す。エルスイの訪問理由は、ニニアンが中傷まがいの悪評を言い触らし、ラーン卿に向かって公衆の面前で、二人が結ばれば大いにめでたい、旨の無礼な嫌味を言った事を非難し、言動を慎むようにジャネットから指導してほしい、というものだった。くできるだけ搾り取り、できるだけ与えないのが信条だと本性を露にするエルスイに、本当にラーン卿を愛しているのか、この人のためならどんな辛酸も厭わないというほど愛している人はほかにいないのか、と追及し、マリオの名前を持ち出す。そしてマリオとの深い交際——釣り旅館に同泊した事実——をラーン卿を呼び出して知らせてもよいか、と迫る。マリオはクラブで仕事をしていたはず、と宿泊事実をエルスイが否定するや、クラブに電話をかけ、確かに仕事はあったが早く切り上げて旅館のある土地へ向かったという証言を得る。慈善舞踏会を抜け出してエルスイとマリオは旅館で落ち合い、「ホプキンソン夫妻」の偽名で投宿したはず、と突っ込まれてもなお、否定し続けるエルスイに、ジャネットはラーン卿の父親バリミーナ侯爵の電話番号を探して連絡しようとする。押しとどめるエルスイに、この不倫は夫ジェイムズへの背信であるばかりか、ラーン卿をも欺く背徳であり、侯爵夫人の肩書き目当てに名目結婚し、マリオとは愛人関係を続ける魂胆だ、と厳しく問い詰める。観念したエルスイは、愛しているのは確かにマリオだが、向こうは数ある恋人の一人としか見てくれない、と告白する。ジャネットはマリオとの同泊を偶然目撃した知人がいることを教え、ラーン卿の寵愛が信頼できるのなら彼にいますぐ電話をして、卿との浮気がジェイムズにばれて痴話喧嘩となり、家を追い出されてしまった、いますぐ迎えに来てくれなければ自殺する、と嘘の連絡をするように説得し、クラブのラーン卿を呼び出したあと、女中に頼んだ列車時刻表(A.B.C.)で大陸行きの列車を調べる。エルスイは指示通りの作り話をラーン卿に涙まじりに伝え、今夜8時20分のヴィクトリア駅発の列車でパリに逃避行する段取りをうまく取りつける。ジェイムズには駆落ちのメモを残し、パリでは客室係りによく観察させて、駆落ちの事実を周知させるようにとの行き届いた忠告をジャネットは与える。そこへ観劇の誘いにジェイムズが登場、エルスイは慌てて退散する。妻が居合わせたことを不審がるジェイムズは、フィリップが帰り際に残したメモを見つけ、「確信もてず」と、読み上げる。ジャネットは笑い続ける。

第3幕。6か月後の同じジャネットの居間。読書に身が入らずラジオをつけたかと思うと消して、また本に向かう。ジャネットが待ち受けていたのは、まもなく離婚訴訟の判決結果を知らせにくるジェイムズだったが、一足先に訪ねてきたのはフィリップで、彼はジャネットに真剣な求愛の言葉を繰り返す。しかし、ジャネットは求婚を拒絶し、いまでも愛しているジェイムズとの復縁の意思を示す。釣りも魚も嫌いな彼女は、違う趣味を押しつけられたくないし、今後もよき友人として毎週の観劇と外食につきあうから、ととりなす。子どもたち3人が法廷から帰宅し、フィリップは退散。復縁を期待するマードにニニアンは自分勝手だと批判し、母親の意向を無視した二人の議論にジャネット



トは苛立つ。やがてジェイムズが到着、気をきかせて子どもたちは座を外す。繁雑な訴訟事務の苦勞を嘆いたあと、世間の噂から逃れてのんびりと休養するために世界一周旅行に出かけ、その後は家庭菜園を楽しむ南イングランドの田舎暮らしをする計画を語り始め、法定期間の6か月後にジャネットとの復縁を提案する。しかしながら意外なことに、ジャネットはこの申し出を拒絶する。彼の話には苦勞をかけた彼女へのねぎらいや配慮の言葉がなく、真珠の首飾りなどの高価な物をねだらない安上がりな妻という決めつけや傲慢さが感じられたこと、夫の知人の接待に明け暮れて自分の交遊関係を犠牲にしてきた夫婦生活よりも、独立した人格をもつ人間として教養を深める有意義な社交を都会生活で満喫したい、という理由からだった。打ちのめされたジェイムズが未練たらしく永遠の別れを告げようとする、フィリップから贈物をする旨の電話が入り、嫉妬心から彼は受話器を奪って電話を切って、飛び出していく。破談を察した女中は意気消沈し、戻ってきたニニアンは母親が求婚を拒否したと知って喜ぶ。そこへ近所の宝石店から贈物の小包が配達される。中身は真珠の首飾りで、送り主はフィリップの先を越そうという魂胆のジェイムズだっただ。また昔のように求愛が始まったわ、と喜びの声を漏らして、彼女は首飾りをつける。

結果的にはロマンティックな結末である。もしジャネットがジェイムズの復縁の申込を無条件に受け入れていたとすれば、彼は自分の偏狭さや身勝手さを反省する機会を得ないまま、以前と同じように無神経な亭主関白を決め込み、結婚生活は再度、破綻をきたしていたかもしれない。拒否の態度を示すことでジャネットがいかにか貴重な存在であるかを痛感させ、同時にフィリップという恋敵の存在がいつそうジェイムズにジャネットへの思いを募らせることになる。総じて、ジャネットの忍耐力や思慮深さが感じられるが、とくにジャネットが2幕でエルスイに示す、毅然として実務的な如才のなさは感嘆を禁じ得ない。不倫相手がエルスイ本人か確証のないまま、女の直感と状況証拠からエルスイに間違いはない、と判断して問い詰めていく対応には、賭博者のはったりめいた剛毅を感じるし、てきぱきと電話をかけて用件を処理していく姿は敏腕実業家を思わせる。マリオのアリバイを調査するべくクラブに電話を入れる場面では、実際に電話せずに大芝居を打つ奇策も想像できる展開だったが、彼女は策略には訴えず、事実の裏付け、客観的情報を得てエルスイを追い詰めている。

### (III) 後期作品の梗概と論評

後期作品とは1930年代から50年代にかけて、主としてアルスター地方の主題への回帰がみられる作品群を指し、フル・レンクス7編と幕数不明2編である。なお、残念ながら半数近くの芝居（\*を施したもの）のテキストが現時点では入手できていないため、『私たちの階級の人々』『私企業』の2作品、および直前になってテキストが到着した『クリスティ家の人々』については研究書の概略的な記述と部分的梗概を掲げ

るにとどめ、考察の対象からは除外した。『私企業』は目録掲載の古書店に発注したものの在庫紛失で未入手、『私たちの階級の人々』は古書目録にすら見当たらないが、入手できれば後日、稿を改めて本誌で報告したい。また、『アマチュアのための道徳』『ガチョウのソース』の2作品は、Frank L. Kersnowski, *A Bibliography of Modern Irish and Anglo-Irish Literature* (San Antonio, Texas: Trinity University Press, 1976) の書誌に記載があるものの、研究書類には言及されておらず、British Libraryにも所蔵されていないため、内容はまったく不明である。

#### 後期作品

『ボイドの店』 (*Boyd's Shop*, 1936年2月19日初演)

『ロバートの妻』 (*Robert's Wife*, 1937年10月25日初演)

\* 『私たちの階級の人々』 (*People of Our Class*, 1938年刊行, 初演不詳)

『親戚知己の方々』 (*Friends and Relations*, 1941年6月30日初演)

\* 『私企業』 (*Private Enterprise*, 1947年刊行)

『クリスティ家の人々』 (*The Christies*, 1947年10月13日初演, 改訂版は

1948年3月26日初演)

『わが兄トム』 (*My Brother Tom*, 1952年3月26日初演)

\* 『アマチュアのための道徳』 (*Morals for Amateurs*, New York: French, 1930)

\* 『ガチョウのソース』 (*Sauce for the Goose*, London: Allen and Unwin, n.d.)

#### ① 『ボイドの店』 (*Boyd's Shop*) 1936 4幕 (全5場)

初演は1936年2月19日、1幕劇『ジョージ爺さんがお茶に来る』『彼女はまったく淑女でなかった』と同じく、リヴァプールのプレイハウス劇場で、演出もアームストロング。

第1幕。北アイルランドのダナリア (Donaghreagh) 村にあるアンドゥルー・ボイド (Andrew Boyd) の食料品雑貨店。麻 (hemp) とハムが並んでぶらさがり、バターの上にコーン・ビーフが置かれ、チーズと歯磨粉が同じカウンターで買えるような雑然とした(アルスター方言で言う‘through-other’な)商品配置ではあるが、個人経営の店では別段困りはしない。午前10時半。14歳の少年アンディが店に入ってきて大声で呼び、65歳の店主アンドゥルーが対応する。この日2度目の両替に彼は現れ、1シリングと6ペンス2枚の交換を頼んだ後で、1ペニー硬貨12枚の方がポケットで賑やかな音がしていい、とさらに細かくくずさせる。アンドゥルーの娘で26歳のアグネスも店に顔を出し、かつて衣料品店だった、向かいのしもた屋の「貸家」の張紙が剥がされ、ドアが開いているのに気づく。なにかにつけて聖書を引用する、お喋りな55歳の常連客マクラーク (Miss Lizzie McClurg) が

近づいてくると聞いて、アンドゥルーはあわてて店の奥へ逃げ込む。彼女はアンドゥルーが妻と死別して以来、彼に秋波を送り続けており、自分とアンドゥルーは似合いのカップル、と若い牧師ダンウッドイ (Rev. Ernest Dunwoody) からおだてられた話などをまくし立てる。そこへ向かいで開業予定の、ベルファースト出身の29歳で美男子のハズレット (John Haslett) が挨拶に現れ、梯子 (実際には、脚立) を貸してほしいとアグネスに頼む。ハズレットが脚立を肩にかついで帰る様子を二人が窓から眺めていると、マクラークが帰ったものと思込んだアンドゥルーがうっかり登場。続いて3人の客——豊満なマクブラトニー (Mrs. McBratney)、貧弱なクロットワージー (Mrs. Clotworthy) とローガン (Miss Minnie Logan) ——が入店。病気がちの長老派教会牧師パターソン (Rev. Arthur Patterson) はそろそろ秋には引退して、若い代理牧師ダンウッドイに席を譲るのでは、とローガンは噂をするが、長老(elder)の一員であるアンドゥルーは信じない。そのダンウッドイはアグネスに気がある、とマクラークは話す。マクブラトニーは大量に商品を買込み、小食のローガンは少量だが念の入った注文をする。そこへ、30歳のダンウッドイ牧師が颯爽と登場。禅譲の噂に困惑しながらも、時代に応じた教会の改革——説教や礼拝の簡素化・時間短縮——を訴える。ハズレットが脚立を返しに現れ、一同と挨拶を交わす。ボイドの店は世間話に立ち寄れる気のおけない店で、会費も入場料も不要のクラブのような存在、ちょっとのつもりでついつい長居してしまう魅力的な店だと、客たちは紹介する。立ち去った牧師をハズレットは、まるで長老派教会大会議長 (Moderator of the General Assembly) 然とした口振りやと揶揄し、アンドゥルーもそれに同調する。やがて婦人客4人は買い物を終えて退散。入れ違いに中年農夫ドウク (William Henry Doak) が久しぶりに来店し、妻の叔父の遺産が転がり込んだからと大量の食料品を注文し、自宅での食事やパブの酒にアンドゥルーを誘う。ついでに声をかけたハズレットが酒を飲まないと言くと、みな酒を止めたらギネス醸造所は倒産、パブ経営者は路頭に迷う、と言って、持ちネタのジョークを農夫は聞かせる。衣類(dry goods) を商う男だから禁酒(dry)なんだ、とアンドゥルーも冗談を言ったつもりが、ハズレットの開業予定の店は、こともあろうに、競合する同じ食料品店だと初めて知らされ、啞然としながらも、ドウクとパブに向かう。ハズレットは、自分の店は近代商科大学で修得した能率至上主義の方針で経営し、成上っていくつもりであり、さらには君に一目惚れした、とアグネスに迫る。そこへ午後9時のデートの打ち合わせにダンウッドイが戻り、ハズレットはガラスが割れんばかりにドアを閉めて出ていく。

第2幕。1か月後の日曜日の夕方5時、ボイドの店の裏のこざっぱりとした居間。アグネスはご馳走の準備を整え、47歳の雑役使用人キャリー (Carrie) が料理を配膳。二人の牧師、パターソンとダンウッドイが招待されており、ダンウッドイはアグネスに惚れている、とキャリーは冷やかす。牧師の妻になったら模範的振舞いをせねばならないから大変だわ、とアグネスもまんざらでもなく、上機嫌。一方、ハズレットの店はクーポン券やチラシ広告を使い、新規開店の物珍しさもあって集客状況は上々だが、意中のアグネスの気を引けないハズレットは苛立っているらしい。父親アンドゥルーが帰宅し、二人の牧師の他に、成り行き上、このハズレットもお茶に招かざるを得なかった、と釈明する。アグネスはたいそう腹を立て、老牧師と父親の間にこの招かれざる客の席を作らせる。アンドゥルーは若い牧師ダンウッドイの説教が娯楽じみて好きになれないが、同じ説教を繰り返す60過ぎの老牧師の方こそ退屈だと娘は言い、地獄の恐怖を臨場感たっぷりに伝える話上手なダンウッドイがいい、とキャリーも賛同する。やがて招待客3名が到着。パターソンは赤ん坊のアグネスに洗礼を施したとき、水もかけぬうちから大声で泣いた、と思い出話を披露。ダンウッドイのために用意していた席にハズレットが抜け目なく着席し、ダンウッドイが代わりにハズレットの予定席につく。祈りのあと会食が始まり、ハズレットは焼きたての干しぶどう入り丸パン (barnbrack) を配る。芋パンを

意味する〈ファッジ〉(fadge)という語彙をダンウッドィが知らなかったことをパターソンが大袈裟に嘆くことから、二人の牧師の間で意見の対立が表面化し、神学より社会奉仕を現代の牧師は重視すべきで、聖職者と平信徒の区別は旧弊であり、聖衣を着用しない牧師もいる、とダンウッドィが持論を展開すれば、他者の模範となる孤独な職務に専念する牧師と平信徒の区別は必要、とパターソンは反論。話題はハズレットの店に転じ、彼は〈ハズレットならなんでも揃う!〉(Haslett Has It!)というポスターを得意気に見せ、先週は8人顧客を開拓したと自慢する。しかし、列挙した顧客の名前が、つけを払わないことでは名うての不良債権人である旨、アンドゥルーに知らされ、落胆する。広告チラシなしでもボイド商店は立派に繁盛した、とパターソンも同調し、消費者は広告費が価格に転嫁されていい迷惑だし、出身商科大学や書物の引用ばかりで独創性がない、とアグネスも冷淡。キャリアが『ダウ州新聞』(County Down Gazette)を持参し、牧師交替の噂の記事が出ていると知らせる。一読して動揺と失意のパターソンに、アンドゥルーたちは気にしないようにとりなし、二階へ上がる。一足先に教会へ出かけたキャリアに代わって食器の後片付けをするアグネスにハズレットは手伝いを強引に申し出て、自分に関心を示してほしい、結婚してほしい、と迫るが、アグネスから拒絶され、流し場へ消える。降りてきたダンウッドィは、魂の救済を説くパターソン流訓話でなく、日常生活に関わる、自由で気楽なトークこそ現代は必要で、一流名士の文芸講演会などを村で開催したい、と意気込みを語る。皿洗いを終えたハズレットにダンウッドィは、アグネスの父親は店舗以外に1万ポンドの預金がある、と話し、牧師引退の噂を流布しているのはダンウッドィではないかと探りを入れられると、彼は否定する。アンドゥルーが降りてきて、ダンウッドィの説教に先立ち、パターソン牧師自らが引退の噂を打ち消し、ダンウッドィもそれを支持する発言をするように伝えるが、「自己弁護は他者譴責」というフランスの諺を持ち出して、渋る。ハズレットを無視してダンウッドィはアグネスと出発し、残された3人もホールの照明を消して教会へ出かける。(第1場)

2時間後の同じ居間。キャリアは流し場の食器がすでに洗われて、しかもハズレットが洗ったと聞いて驚く。説教前のパターソン牧師の引退否定声明は効果がなく、かえってダンウッドィを後継者に推す声が上がったのをアンドゥルーは嘆き、ダンウッドィ赴任以降にこの噂が広まった不自然さから、彼への疑念を表明する。アグネスは説教に出かける途中にダンウッドィからプロポーズされたが、本当に結婚したいのか自信が持てず、回答を保留した、と伝える。妻に先立たれたアンドゥルーにとって、娘はかけがえのない宝物だが、自分の選んだ道を進むようにと諭す。そこへ、深夜にも関わらずハズレットが訪ねてきて、寝ても覚めても君のことばかりだと、再度結婚を申し込む。アグネスは、明日ダンウッドィと婚約するつもりだと退けるが、自分の気持ちは永遠に変わらない、と言い残してハズレットは去る。消灯してアグネスは就寝。(第2場)

第3幕。3か月後の午後9時の同じ居間。読書中のアグネスのもとへハズレットが父親に会いにやってくる。パターソンの引退が決まり、後継者選考の長老会議にアンドゥルーは出席して留守だが、帰宅するまで待つ、と言う。後継者は無論ダンウッドィで決まりだろうし、栄達や配偶者まで射止める僥倖に恵まれた彼と違い、自分の経営する商店は破産してしまった、女は出世する男しか眼中にない、とハズレットは荒れている。無視して退席しかけたアグネスにハズレットの号泣に近い叫び。やがてアンドゥルーが帰宅し、予想通り、ダンウッドィが牧師後継者に任命されたことを伝える。ハズレットはアンドゥルーに宣伝への過剰投資と不良債権による経営悪化で破産寸前であり、帳簿を点検のうえ助言して欲しい、と申し出、アンドゥルーはいささかの経済援助を約束する。ダンウッドィが朗報を伝えにきたので二人は外へ出る。アグネスが降りてくるまでの間、ダンウッドィは早くも牧師就任の初の説教の文句をリハーサルし、キャリアに目撃されて恥ずかしがる。二人きりになるとダンウッドィは、就任のほとぼりがさめる1か月後に婚約発表すればなお効果的で、この村の牧師にと

どまらず、この地を足がかりに、ゆくゆくはベルファースト、ロンドンでの活躍を視野に入れ、史上最年少の大会議長になる、と野望を語る。アグネスは引退説の流布者がダンウッド自身なのかどうか、率直に質問するが、〈老人が教会を牛耳っている〉程度の一般論しか発言していない、と彼は否定する。ダンウッド自身も持説通りに早期引退するのか、との問いには、才能ある者には年齢制限しない、と二重基準を示す。二人はキャリアに婚約を内密に知らせ、彼女は嬉しさに涙ぐむ。戻ってきたアンドゥルーは、ハズレットの持つ在庫品を同じ値で買い取ることで破産から救済できる見込みだ、ハウ・ツー本を読んでアイデアばかりになったから失敗した、と告げる。貧民や病人救済の社会事業計画のアイデアが自分にはある、とダンウッドは語る。ハズレットとパターソンが訪ねてくる。牧師としての自己の非力を後悔するパターソンをダンウッドは慰め、アンドゥルーに見送られて教会の牧師館へ戻る。アンドゥルーはダンウッドとアグネスを二階へ上がらせ、自尊心を失ったと嘆くハズレットを諫めつつ、救済案の協議を続ける。アグネスの提案をいれて、ハズレットの不良債権まで買い取り、債券回収15%を目途に強硬策をとれば破産を回避できるうえに、再出発の資金も残ることを聞かされるとハズレットは喜ぶ。アンドゥルーは娘が牧師と結婚すれば、代々続いたこの商店の跡継ぎが途絶える、と苦悩する。夕食をハズレットに勧めると、戸外で群衆のただならぬ喚声が聞こえる。自分の店が火事だと知ったハズレットは慌てて駆け出す。マクラグ夫人が息せき切らして駆けつけ、キャリアは地獄の炎の審判だと予言、全焼を免れぬ猛火だ、とアンドゥルーは伝え、延焼は食い止めたものの、ハズレットは負傷して病院に運ばれた、とダンウッドも報告し、破産した店が火災にあえば、保険金がおとりで有利だ、と口を滑らせる。運よくハズレットは軽傷ですんだが、焼け出されて寝る家がないため、アンドゥルーは彼を自宅に連れてきて介抱する。アグネスは初めてハズレットをジョンと呼び、ベッドの準備などをかいがいしくする。愛しいまなざしでハズレットはアグネスを見つめ、彼女は俯く。

第4幕。翌朝のボイドの店。マクブラトニー夫人とクロットワージー夫人が昨夜の火災について、火事は結婚や葬式よりも見物で、壮麗な葬儀が営まれない昨今、とりわけ素晴らしかった、と語る。火事の興奮で一睡も出来なかったローガンも来店し、マクラグ夫人の語る噂として、ハズレットが保険金目当てに放火したのでは、と聞かされ、日頃おとなしい彼女も「白く塗りたる墓(=偽善者)」のマクラグ夫人に食ってかかった、と言う。そこへ当のマクラグ夫人が登場し、両者の間で激しい口論が再燃する。アグネスが仲裁に入り、ダンウッドも口論の原因を尋ねる。すると、金が必要なきに火事になるとは幸運だ、と言っただけで、しかもそれはダンウッドの口真似だ、と白状する。ダンウッドも確かに自分の発言だと認め、火災直前までハズレットが一人で店にいた状況証拠からそういう心証を抱くのは仕方がない、と弁明する。これにアンドゥルーやアグネスが誹謗だと息巻くと、マクラグ夫人は、パターソン引退の噂を人々に吹き込んだのもダンウッドだった、と暴露する。『ダウ州新聞』への投稿疑惑も彼は否定できない。そこへハズレットが登場し、保険金放火の嫌疑を知ると、実は商店には保険をかけていなかった、と打ち明ける。同情したローガンは保険会社の担当者に圧力をかけて保険をかけていたことにさせよう、などと提案し、先程までの口論はどこへやら、担当者の遠い親戚にあたるマクラグ夫人を誘って交渉に出かける。店舗も在庫も焼失したハズレットに、嫁ぐ娘の代わりに店の助手の仕事をアンドゥルーは斡旋し、彼は喜んで承諾する。ダンウッドはこの就職斡旋は間違いだと決めつけたうえ、アンドゥルーは隠居すべきだと語る。アグネスは自分は店員の仕事に満足を感じてきたし、牧師の妻の重責を担う自信がもてない以上、結婚したくない、と断言する。立腹したダンウッドは気が変わったらすぐに連絡を、と立ち去る。アグネスはキャリアに婚約解消を告げ、火事現場から戻ったハズレットにプロポーズを受け入れる、と告白、ハズレットはきつくアグネスを抱き締める。店の看板「ボイド」にアグネスが書き添えた「ボイ

ドと息子」を見たアンドゥルーは感激する。二人の挙式は、パターソン老牧師が勤める最後の婚礼となるだろう。

めでたく大団円に終わる人情味ある佳作である。1幕で登場するハズレットは商売敵の競合店を出店し、アグネスを口説き落とそうとする高慢な青年であったが、事業の失敗と失火の挫折を味わってからは同情心のある青年に変わる。それとは対照的に若い牧師ダンウッドの流言蜚語——グレゴリー夫人 (Lady Gregory, 1852-1932) の『噂の広まり』 (*Spreading the News*, 1904) が先鞭をつけているが——や中傷投書の巧妙な策略が暴かれ、彼の偏狭さが露呈されていく。男の本質を見抜く目がアグネスに当初はなかったとも言えるし、ダンウッドがどうしようもなく腹黒い、根っからの悪人というのでもない。それぞれに落ち度を抱える人間が、早くその落ち度に気がつく契機となるために神が下し賜うのが、不幸なのかもしれない、と思わせる。前稿でも触れたように、著者アーヴィンが子ども時代に深い愛着を寄せた祖母マーガレットの金物店がモデルとされる「ボイドの店」は、村の雑貨屋が地域社会の人々の歓談の場として機能していた古き良き時代の郷愁に満ちた作品である。『ジョン・ファーガソン』で見せた狂おしいまでに深刻な葛藤はここにはないが、アーヴィンの力量を感じさせるウェル・メイド劇と評してよいだろう。

## ②『ロバートの妻』 (*Robert's Wife*) 1937 3幕 (全6場)

初演は1937年10月25日、エディンバラのキングズ劇場 (収容規模1472席)、その後、同じキャストで11月23日にウェスト・エンドのグロウプ劇場 (収容規模907席) で再演。主人公サンチアを初演で演じた、英国の女優エヴァンズ (Dame Edith Mary Evans, 1888-1976) と、ロバート役の俳優ネアズ (Owen Nares) に献辞が捧げられている。

**第1幕。** イングランド南部の工業都市カンバミア (Combermere) の聖マイケル・アンド・オール・エンジェル牧師館の居間 (以下、すべてこの居間で演じられる)。教区牧師ロバート・カーソン (Rev. Robert Carson) の秘書で、22歳のジューン・ハンヴェイ (June Hanvey) は、堅信式<sup>23)</sup> (confirmation) に参加予定の、39歳で女医のサンチア・カーソン夫人 (Mrs. Sanchia Carson) の到着が遅いのを心配し、夫人は教区の仕事に少しも関心がないと嘆く。教区に勤務奉仕するミス・オーリー (Miss Christabel Orley) が花を持参。やがて夫人が帰宅、勤務先の診療所で昇格したことで喜色満面。そこへ20歳の青年ディック (Dick Jones) が来訪。彼は身篋もらせた責任をとって、ヒルダという女性と結婚する決意を固めたが、母親のかたくなな反対に会い、身の上相談に来たのだった。生まれてくる赤ん坊の幸福を考えれば、結婚しなければならない、いざとなれば治安判事かけあっても結婚を認めさせる、とロバート牧師は応じる。サンチアは診療所拡充資金5千ポンドを搾り取るために、

大富豪のアーミティッジ夫人 (Mrs. Minnie Armitage) の気を引くように配慮する。67歳のウィンターベリー主教 (Bishop of Winterbury) が到着し、首相と昵懇の彼は、ロバートを地方執事 (dean) の職に推挙し、ゆくゆくは自分の後を継いでほしい、とまで言う。(第1場)

3時間近く経過し、堅信式も終了した頃。サンチアとミス・オーリーが居間に戻る。自分には宗教心はないが、美しい儀式に感銘した、とサンチア。世の中の悪と戦う兵士のような生き方を主張するサンチアに、オーリーは人殺しをする病人でも直してやるのは正しいことだろうか、と医療と倫理の根本的問題をめぐって話し合う。ディックの母親、ジョーンズ夫人 (Mrs. Jones) が来訪し、息子の結婚に反対であること、派手な化粧で身持ちも悪く、料理下手で映画好きな女工風情は息子に相応しくない、と主張するが、式を終えた主教やロバートから、一番大事なのは生まれてくる赤子の幸福であり、私生児にしてはならない、と説得され、考え直すことにする。カーソン家の一人息子ボブ (Bob) は、共産主義思想に染まったオックスフォード学部生で、戦争を賛美しないしてほしい、と主教に要望するが、先の大戦で自身、3人の息子を失った主教は、殉死者を称えるのは自分の使命だ、と答える。(第2場)

第2幕。半年後の9月の夕刻。秘書ジューンとミス・オーリーは、失業者救済事業を訴える教会発行のピラ整理をしながら、反戦集会に出かけたサンチアとボブの帰りを待っている。南ウェールズの幼児死亡率を知らない、と答えたジューンは、ボブからブルジョアと批判されたようだが、実はこの二人はひそかに婚約している。参加者37名の小集会から帰宅したサンチアは、女性は軍縮のために出産拒否闘争をすべきだと、ボブが提案したと伝える。失業者救済は対症療法 (palliative) にすぎず、社会の根本的な仕組みを丸ごと矯正せねばならぬ、とボブは唱え、戦傷者が収容されているハングオウヴァ (Hangover) 病院を今朝、訪問して、人を殺すことがいかに堪えがたいか、痛感したと吐露する。生命に執着するのは無益で、人生は幕間にすぎない、と達観した人生観をミス・オーリーは披瀝。帰宅したロバートは、遅い時刻まで残業してくれる二人に<sup>ねざら</sup>労いの言葉をかけ、二人はなおも作業の仕上げに別室に移る。サンチアが聖メアリー墓地内に開設した野外託児所 (open-air crèche) に関して、子どもが墓地を駆け回るのは死者への冒瀆であると、託児所がある聖エセルバータ (St. Ethelberta's) 教区を所轄するジェファーソン牧師 (Rev. Arthur Jefferson) から抗議の声が上がっていることをロバートは伝え、進歩にはそうした保守反動はつきものだが、漸進的改革に変えてはどうか、と促す。しかし、神が賜いし苦痛だからと麻酔使用が禁じられ、遺体解剖実験が焚刑で報いられた医学史をサンチアは指摘し、いつの世も先駆的な医師は聖職者の妨害にあってきた、つねに正義の自分は、悪と妥協するつもりはいっさいない、と答える。ロバートは、建前上は別人格でも、一心同体と見なされがちな夫婦それぞれの行動は互いに影響を及ぼす、と論ずるが、ジェファーソンこそ、偏狭な蒙昧主義者 (obscurantist) で、富の邪神マモン (Mammon) に仕えている、と反論、成果によって判断してほしい、と訴える。妻の仕事は夫の仕事より劣ったものとみなされ、夫が栄転した場合は妻が仕事を諦めるのが当然、という風潮にサンチアは異を唱え、もしロバートが40マイル離れたウィンターベリーの地方執事に昇進すれば、現在の診療所勤務は断念するものの、かの地で新しい診療所を開く、と意気盛ん。そこへ、リンズィ警部 (Chief Detective Inspector John Lindsey) とフットヴォイ警部補 (Inspector Edward Futvoye) が訪問。二人は、兵士に徴召拒否を訴える文書頒布による煽動罪容疑で息子ボブに対する逮捕状を持参している。ロバートに自室から連れてこられたボブは逮捕容疑をあっさり認め、戦争を止めさせるために兵士に武器放棄を訴えるのが罪なら、たしかに自分は有罪だと言う。戻ってきた婚約者ジューンやサンチアも逮捕に抗議するが、国防義務を負う兵士への反戦煽動は大きな罪であると警部は答え、ボブの部屋から証拠物件を押収し、彼の身柄を警察署へ移送する。ロバートは顧問弁護士トムプソン (Thompson) に電話して事情を説明、ジュ

ーンとサンチアはボブの着替えを用意して同行する。残ったロバートは困惑の表情を浮かべる。(第1場)

2日後の午後。ボブはいったん保釈となり自宅謹慎中。逮捕の影響で診療所への寄付取消しが3件もあり、聖人や殉教者のつもりなのか、それとも目立ちたがり屋の露出狂なのか、とサンチアが非難するが、人々に真剣に考えてもらうためにはこうした劇的な行動が必要だった、と真摯に弁明するボブに、言葉が過ぎたと、サンチアは謝る。富豪のアーミティッジ夫人が来訪。ボブ、ジューンは簡単に挨拶をして場をはずす。夫人は英国国教会のなかでも新教寄りの低教会派 (Low Church) 信徒であるが、ジェファーンソン牧師の属する、旧教寄りの高教会派 (High Church) の荘重な儀礼も気に入っており、どうやら彼の教唆により、サンチアの診療所への寄付を慎重に再検討する時間がほしい、と切り出す。亡夫の銅像が診療所玄関ホールに設置されるのは歓迎だが、11月からは長期の避寒に南仏滞在する予定もあり、拙速に事を運びたくない、との申し入れをして、夫人は立ち去る。ウィンターベリー主教とロバートが登場し、ボブの処遇見通しは楽観を許さず、投獄の可能性もあることを知らせる。産児制限を指導しているサンチアに、出生率低下は種の絶滅につながる、とロバートが反論すると、大砲の餌食 (cannon fodder) となる若年兵が減れば戦死者も減少する、十戒にもく汝、殺すなかれとある、とボブは反戦論をぶつ。これには主教が異を唱え、ユダヤ人モーゼが同胞ユダヤ人による大量虐殺を戒める歴史的背景がその戒律にはあり、日頃きちんと聖書を読みもしないで安易に引用せぬように諫める。ディックの母親ジョーンズ夫人が再訪。息子夫婦には2週間前に男の赤ん坊が生まれていたが、今朝その子が亡くなった悲報を告げる。〈子はかすがい〉という牧師たちの説得を受けて結婚を認めたのに、肝心の赤ん坊は死に、役立たずのあばずれ嫁だけが残ったこの結婚は完全な失敗であり、もう他人の私生活に口出しするのは止してほしい、と泣きながら帰るのを、サンチアは見送りに出る。地方執事候補の件を主教が尋ねると、自分の都合を優先して、医療を断念するよう妻を説得するのは悩ましい、と語るロバートに、医者の代わりはいくらでもいるが、物質主義に染まった若い世代を精神世界に鼓舞する優れた才能を持つ聖職者は余人をもって代え難い、と説得する。サンチアが戻り、主教は帰路に就く。昨日、首相と会談した主教から聞いた話として、逮捕が新聞ダネになったボブのみならず、診療所拡張問題で揉め事を起こしている妻のサンチアの存在にも首相は懸念を表明しており、しばらく穏便に事を進めてほしい、とロバートは促す。しかしサンチアは、世間の人々は聾啞の犬や馬になら喜んで寄付するのに、人間の子どものための施設には寄付を渋る、アーミティッジ夫人の巨額の献金が期待できないいま、ジェファーンソン牧師を敵に回しても募金活動をせねばならない、愛しているから離婚はもちろん望まないが、夫の仕事にひけをとらない、医師としての職務に、どんなことがあっても専念する、と断言する。(第2場)

**第3幕。**1か月後の10月の夕刻。19歳の小間使のアン (Anne) が2度の電話に應對し、同情の趣旨の伝言をロバートに伝える。ボブには禁固1年の実刑判決が下りたようで、余りに不当な量刑にジューンは涙を禁じ得ない。再び電話が鳴り、『ウィンターベリー新聞』社の記者からの、今回の判決に関して恩赦を要求する記事を掲載したい旨の取材依頼で、ロバートはこれを快諾する。ジューンはこの日の最後の秘書業務として郵便物を取りに行き、ロバート夫妻の指示を仰ぐ。サンチア宛ての郵便物にはアーミティッジ夫人からの (診療所拡張の) 委員会退会及び寄付辞退の手紙があり、今後はいっそう草の根募金活動を展開する決意を彼女は固める。精神的疲労が極限に達して泣きじゃくるジューンを支えて、二階の寝室までサンチアは随伴。新聞記者来訪をアンが告げ、ロバートは取材に応じるため居間へ向かう。戻ってきたサンチアに、今度は宿敵ジェファーンソン牧師の来訪が告げられる。牧師はボブへの判決に同情の念を表し、恩赦の請願や抗議集会参加など助力を惜しまない、と申し出た後、産児制限を指導する診療所拡張の意向をサンチアが撤回しないなら、教区内の信徒に寄付



撤回の圧力をかけ、診療所を閉鎖に追い込むまでだ、と脅しをかける。サンチアはこれを拒絶し、交渉が物別れに終わったジェファーソン牧師が帰りかけた頃、ロバートが登場。ジェファーソンの脅しを知った彼は、妻に売られた喧嘩は自分が買う、とばかりに、これからは妻の開催する集会に参加して応援演説をする、と宣言する。主教が来訪し、懇意でないジェファーソン牧師は辞去。夫の突然の支援表明にサンチアが感激して抱きついたところへ、主教が登場。ロバートは事情を説明し、募金運動派と募金反対運動派の衝突が予想される以上、地方執事昇進を首相に推挙するのは取り下げてほしい、カンバミア市の教区牧師の現職でも満足できると、伝えるが、最後まで推挙する方針は捨てない、と主教は言い残して立ち去る。地方執事に未練はあるが、妻の仕事が妨害されるのを傍観できない、と語るロバートに、サンチアは彼への愛情の深さを情熱をこめて訴え、ロバートは妻を抱擁してキスする。(第1場)

2週間後の午後。ロバートが目を通して夕刊には、前夜起きた、対立集会の騒動の記事が大きく取り上げられ、禁固判決を受けたボブの代わりにロバートが世間の注目を浴びる存在になっているのが、ジューンには気に入らない。サンチアは「穴を掘らねば土台は築けぬ」(虎穴に入らずんば虎児を得ず)という信条から、騒動を継続することに同意するが、募金活動そのものは思うように進展していない。また、主教はロバートの地方執事推挙を依然として諦めておらず、辞退の意向を首相の耳には入れていない。ジューンの手伝いに来ていたミス・オーリーが姿を見せて、サンチアと二人きりの相談を希望し、ロバートは席を外す。現状がこのまま続ければ悲惨な事態に陥る、として、ミス・オーリーは思いがけない提案——サンチアが診療所勤務を断念することを条件に、診療所拡張費用の5千ポンドは自分が提供する——をもちかける。診療所経営はサンチアの助手に委託し、ミス・オーリーは医療事務員として診療所に住込み、経営状態を報告したり、サンチアの指導を仰ぐことも出来るし、ロバートも地方執事に任命される、と説明するミス・オーリーは、ロバートに会った時から愛情を抱き続け、この寄付も彼のための提案であり、女は男のためにすべてを諦めるものだ、と断言して憚らない。即答を保留するサンチアに、ミス・オーリーは用意していた小切手を置いて、すぐに退出する。人を愛したり結婚を望んだりしないタイプの女性、とミス・オーリーを評するロバートに、サンチアは彼女から貰った小切手を見せ、診療所はこれで安泰で、騒動を招く募金集会の必要もなく、夫と共にウィンターベリーに移る決心をした、と語る。自分への叶わぬ愛情に基づく寄付とは知らないロバートはしきりにミス・オーリーの気前の良さを褒め、本で読んだばかりの天文学の知識——光は秒速18万6千マイル(約30万キロ)で、1光年は6兆マイル(約10兆キロ)、地球に最も近い星でも4.5光年離れているから、いま見える星は実際にはもう存在しないのかもしれない——を受け売りする。とても不思議な感じね、サンチアが相槌を打ち、幕。(第2場)

標題『ロバートの妻』が端的に物語るように、この作品では妻サンチアは最後には医者仕事を諦め、夫の栄達とそれに伴う転居を選び、内助の功に徹する道を進む。初期の戯曲『ジェイン・クレッグ』のように女性主人公の固有名詞が標題にとられなかったことから、男に一步譲歩する結末となっている。しかしながら、無神論者の女医と敬虔な教区牧師の夫婦が、それぞれの職業に誇りを抱き、互いの独立を認めながら暮らす姿は、現在でも十分参考とすべき夫婦の在り方を示唆している。今日の観点から問題とされるのは、医者(サンチア)の代わりはいくらでもいるが、牧師(ロバート)の代わりはいない、とする論理の妥当性であろう。たしかにロバートの言う

ように、肉体の救済よりも魂の救済を大事だと考えるのは理解できるが、精神科医のみならず医師は多かれ少なかれ、肉体の治癒を通して心のケアも果たしており、卓越した医師は牧師の要素も兼ね備えているのではないだろうか。芝居の最後で、医者だから科学のことは知らない、とサンチアが答えるのも、現代の医学教育のカリキュラムから考えれば不自然な台詞であろう。また、もしミス・オーリーからの予想外の寄付という偶然の幸運が得られなければ、あっけないハッピー・エンディングは訪れなかったはずであり、その場合、カーソン夫妻はどのような運命を迎えていたのだろうか。それはミス・オーリーが予言するように、ほんとうに悲惨な末路を辿るしかなかったのだろうか。妻サンチアの譲歩だけが解決策で、夫ロバートの譲歩は徒労に終わったのだろうか。結果的にミス・オーリーの金がすべてを決着させる展開は、是とすべきだろうか。著者が「喜劇」と銘打つこの作品に、こうした詮索は無用かもしれないが、おそらく今日の女性の中にはこの安直な結末を受入れ難い向きもあるに違いない。先妻の子ボブの反戦思想は、やや書物から得た知識に頼りすぎるきらいはあるものの、1幕劇『進歩』でも触れたように、戦争体験を持つアーヴィンの声がこだましている。そしてこの作品でも、親と子の世代間の価値観の対立、男性と女性の認識の相違が強く浮き彫りにされている。カトリックに近い高教会派、あるいはアングロ・カトリックとも呼ばれる一派に属するジェファーソン牧師が、やや否定的に描かれているのも、アーヴィンのプロテスタンティズムの影響だと思われる。

わが国の2003年版『男女共同参画白書』によれば<sup>24)</sup>、「夫は仕事、妻は家庭」の役割分担意識調査(2002年)で、「賛成」(8.1%)「どちらかといえば賛成」(28.7%)とこの役割分担を支持する割合(約37%)を、「反対」(25.6%)「どちらかといえば反対」(31.7%)と否定する割合(約57%)が1.5倍上回ってはいるものの、同年の英国の圧倒的な否定傾向(否定9割、支持1割)に比べれば、わが国はまだ伝統的な固定観念にとらわれていることが分かる。1930年代の北アイルランドを対象とした、この種の世論調査資料を筆者は持ち合わせていないが、「夫は仕事、妻は家庭」という意識が当時の北アイルランドでどの程度まで普遍的であったかが分かれば、ロバート夫婦の先進性・特殊性がいっそう明確になるだろう。

### ③『私たちの階級の人々』(テキスト未見)

グレゴリー・マーチ少将(Major-General Gregory March)の二人の娘シーナ(Shena)、ジェニファー(Jennifer)にはまだ求愛者がいない。この二人が男やセックス、結婚の話を始めると、あまりの露骨さに少将は赤面を禁じ得ないほどで、ジェニファーは水着姿でテニスに興じ、結婚しなくても大いに楽しめると言って憚らない。

(最後には海軍士官のゴードン・アンドゥルーズを彼女は選ぶけれども。) シーナは、愛想のいい軟弱紳士よりも逞しい男性を好み、肉屋の倅ヘンリー (Henry Hays) に惹かれるが、父親の少将はもちろんのこと、ヘンリーの父親も、料理はおろかベッド・メイキングもできないシーナとヘンリーの結婚に反対する。

このほかに、旧約聖書時代は当然のことだからと一夫多妻制を唱えるアガサ (Agatha)、自由を制限されるのは嫌だから結婚を拒否するオディ (Oddie)、オディのように男が結婚しないのだから女が身を持ち崩し、未婚の母となるのはやむを得ない、と説くミルドレッド (Mildred) などが登場し、若い世代が気軽に性の話題を繰り広げるので、年配の世代は狼狽する。女性がズボンを穿いたり、壁のように厚化粧したり、獣のかぎつめのように長く爪を伸ばす流行に古い世代は驚愕する。

少将の息子エドワード (Edward) は、酔った勢いで救世軍の福音伝道者トムプソン (Thompson) をからかおうとしたが、磔刑のキリストの姿を見て改心して救世軍に入る。彼は、酔払いが悔悛の席 (penitent) に着くや半時間も経たぬうちに素面で立ち上がった様を見たことがあると語る。こうしたエピソードは救世軍の文献に没頭していた著者アーヴィンの体験が反映されているが、性風俗を扱う、卑俗な主題のこの作品にはそぐわない印象を与えるであろう。不道徳でふしだらな言動に満ちたこの作品は、こんにちでは古臭く感じられるが、当時はポルノまがいに受け止められ、まだ(1970年時点) 上演にこぎつけていないという。

#### ④『親戚知己の方々』(*Friends and Relations*) 1941 3幕

初演は1941年6月30日、ダブリンのアビー劇場(収容規模638席)。フランク・ダーモディ (Frank Dermody) 演出。

**第1幕。**ベルファースト郊外ストーモント (Stormont) のスリーヴ・ベアナ・ハウス (Slieve Bearnagh House) にあるサミュエル・レパー<sup>25)</sup>卿 (Sir Samuel Lepper) の邸宅の居間 (morning-room)。当家の主人レパー卿の埋葬が午後に営まれ、親の代からの骨董家具が鎮座している。扉が開き、家政婦ケイト (Kate) [60歳]の案内でレパー卿の姪ファニー・ケアンズ (Fanny Cairns) [45歳]とその息子アーサー (Arthur) [23歳]が登場。ファニーは一徹な女性で、アーサーもイートン校とオックスフォード卒業生で一家言を持つ。死者への敬意としてブラインドを下ろしていたケイトに、因習にすぎないと二人は部屋を明るくさせる。続いてファニーの兄、つまりレパー卿の甥にあたるエドワード・スカントルベリー (Edward Scantlebury) [53歳]が登場。いつも酒臭い大酒のみである。遅れてファニーの娘ドリーン (Doreen) [20歳前後]、レパー卿の又従兄弟 (second cousin) のアダム・ボスウェル (Adam Bothwell) [49歳]、最後にレパー卿の実妹エスター [エシィ]・コークン未亡人 (Mrs. Esther [Essie] Corken) [70歳]が登場する。葬儀を終えた彼らは、アダムを別にすれば、財産分与の遺言状が弁護士によって読み上げられるのをいまや遅しと、心待ち

にしている。クィーンズ大学から名誉文学博士号を授与された、専門家受けのする文学作家（‘a critic’s author’ [298]）のアダムは、レパー卿から生前疎んじられていたことを認識しており、相続にはほとんど期待を寄せていないが、弁護士からの助言で同席している。アル中のエドワードとインテリ青年アーサーは辛辣にやり合う。アーサーは、レパー卿の財産は「プロレタリアート階級を搾取することで」（By exploiting the proletariat! [299]）で得られたもので、本来「すべての努力は共同的なもの」で、「酒こそはアイルランドの呪い」、さらに言えばウィスキーやワインとともに、紅茶が最悪の飲み物だと主張する。

やがて弁護士のフィンレイ（James Finlay）[60歳]が到着。難解な法律用語で書かれた長文の遺言そのものの朗読は避け、遺言と別個に故人が認めた私信の朗読を行うように委託されている旨を告げる。遺言は一般閲覧や複写も許可される公文書扱いとなり、遺族だけに伝えたい私的メッセージが故人にはあったのだという。厳封された封書を回覧し、自署であることを出席者全員に確認させ、いよいよ開封の段になって、ある女性の来訪を家政婦ケイトが告げる。葬儀にも参列していたジェニー・コン（Jenny Conn）と名乗るこの見知らぬ女性[30歳位]は、自分は実は故人の非嫡子の娘であると宣言し、出生証明書や写真、愛人だった母親宛ての故人の書簡などの証拠書類を示す。コーケン未亡人やエドワードたちは隠し子の存在を疑うが、故人と生写しの容貌のジェニーを前に、彼女の陪席を不承不承受け入れる。こうして結局、7人の親類縁者が揃った席で私信朗読が始まる。財産をたかりにくる親類縁者への嫌悪表明に始まるこの辛辣で衝撃的な手紙は、まず妹エスター夫婦への非難が述べられ、エスターの相続遺産はなにもない、弁護士は説明する。続いて「アイルランド一の無精者かつ酔払いといっても過言でなく、この世から消えてなくなれば住みよい世界になる」エドワードにも、遺産分与はなし、と断言される。3人目の姪ファニーについては、好意こそないが、我が身と我が子たちを思い、独立心にみちた、きつい性格には敬意を抱く、と一定の評価を示すものの、他人の悪口ばかり並べる「教育を受けた愚か者」（an educated ass）で「卑劣漢」（snipe）の息子アーサーともども、一文も遺産は与えない、ただし、依存心が強く庇護を必要とする娘ドリーンには1,000ポンドを与える、と述べられる。又従兄弟のアダムは自分にまったく迷惑をかけなかった点は立派だが、その著作は読んでも皆目分からない代物だった、と述べられ、旧約聖書『創世記』に出てくるメルキゼデク<sup>26)</sup>（Melchisidec [sic]）のように、一切の係累を持たぬ天涯孤独の身であればよかった、金目当ての追従者やたかり屋に囲まれる日々は生き地獄だ、と訴える。そして、家政婦ケイトに500ポンドと週3ポンドの年金を指定したあと、熟慮の結果として、残りの全財産——重い相続税（Death Duties）を納めても、その額は50万ポンドに近い——は、本来ならば自分の子として認知する非嫡子ジェニーに渡すところだが、独立して自活能力のあることを理由に分与せず、又従兄弟のアダムに与え、彼女の処遇もアダムに任せる、と締めくくる。思いがけない遺言内容に憤怒や落胆、当惑を見せる一同を残して弁護士は去る。遺産の件をドリーンから伝え聞いたケイトは感激し、この屋敷の新しい主人となったアダムのもとで引続き奉公したいと申し出る。転がり込んだ大金の対処に困惑するアダムは、暫くの間、検討する旨を一同に伝える。ケイトは葬儀後の伝統的な儀礼酒であるポート・ワインを客人に勧め、自らもすすりながら孤独な人生を送った故人をしのぶ。

第2幕。2か月後の同じ居間。アダムに所有権が移ったこの屋敷には、ジェニーを除く親類たちがそのまま居ついて暮らしている（エドワードは2週間前にお茶に寄った後、居候を決め込んでいる）。アダムから呼出しを受けたジェニーだが、アダムの姿が見えないので、ケイトは庭師ジョン・ジェイムズ（John James Gourly）老人に主人を捜しに行くよう言いつける。庭に女性裸像のアートを設置するなどリフォームが行われている他は、屋敷はこれまでと変わらない。ドリーンが登場し、母親ファニーからアダムとの結婚を勧められていること、自分もアダムに気があることを話す。アダ

ムとの相談を邪魔されたくないジェニーはドリーンに散歩を促す。やがてアダムが現れ、彼は遺産を平等に7人で分割する決心を告げる。大金は自分には不要であり、遺言作成時のレパー卿の心理状態が錯乱、とは言わないまでも不機嫌 (feeling sour) だったためにこうした異例な内容となっただけで、平等な分割こそが本来の姿だと主張する。ジェニーはレパー卿自身が分割を望まず、もし分割されれば、たとえばエドワードは酒に浪費するだけで、父親を心底から愛している自分は形式的な分割案には断固反対だと答える。相続後に無心の依頼がひっきりなしに舞い込み、これまでの人間関係がぎくしゃくして、金は得たが友人を失い、かえって不幸になった、と嘆くアダムに、世間は「家畜」(cattle)と「家畜追い」(drivers)、すなわち強者と弱者で成り立ち、大人になりたくないピーター・パンのような、責任逃れの提案だとジェニーは批判する。そこへアーサーが突然入ってくるが、アダムは冷たく追い払う。続いてジェニー来訪を聞きつけたファニーが登場。家政婦ケイトが最近、高慢な振舞いをみせるので(表向きは高齢を口実に)解雇し、代わりに知り合いの立派な執事を雇い入れ、身分相応の贅沢な暮らしをすべきだと勧める。ドリーンとアーサーが戻り、エステルとエドワードもお茶に呼ばれる。甘党のエステルは砂糖菓子が用意されていないのに不満をぶちまけ、ケイトを呼ぶが、なにも用意がない、とすげなく答えてケイトは去る。遺族全員が再び顔を揃えたこの席で、アダムはさきほどの決意——7人全員による平等な遺産分割——を提案する。しかしエステルとエドワードは、この良心的な提案に対して、ファニーの子どもたち(ドリーンとアーサー)の排除を主張する。7分の1ずつだとファニーの家族が7分の3で半額近くを占め、二人を除外した5分の1の分割で、子どもたちは母親の相続分から貰うのが妥当だという論拠からである。一方、ファニーは深慮遠謀から即答を避け、判断を留保。ジェニーはあくまで分割反対を唱え、怒ったエステルから「私生児」(bastard)呼ばわりされて口論となる。アダムが全額保持し、めいめいに小遣いの形で与えれば、分割の相続税を免れるのでは、とのドリーンの提案に、エステルは、アダムにもし万一のことがあって小遣い支給が不能になった場合どうするのだ、と反対するが、アダム死去の場合、自分ももっとも近い血縁で次の相続権があると知ると、一転して納得する。高級文芸誌創刊というアーサーの提案はもちろん一顧だにされず、結局、結論は持越しのまま、散会となり、ジェニーは屋敷を後にする。ジェニーがアダムの心を引きつけており、二人は結婚しそうだ、若すぎるドリーンと結ばれることは絶対はない、と鋭い観察を示唆して、エステルは退出する。アーサー、エドワードも出て行き、残ったファニーは娘ドリーンにアダムとの結婚の意思を問い詰める。情熱的にアダムを愛しているわけではないことを知ったファニーは、遺産が分割されぬように、なんとしてもアダムから惚れられ求婚されるように努めなさい、と叱咤する。そしてアダムを呼んで本心に探りを入れるが、やはり若すぎるドリーンは結婚対象でない、と知ると、共同してエステルとエドワードを屋敷から厄介払いする画策を持ちかける。(遺産の心労で荒んだ精神になっていたアダムはこれに応じる。)そして寡婦である自分だけが同じ40代のアダムの家に同居していれば世間の悪い噂の種になるだろうから、自分も屋敷を出る、と伝え、この土地の思い出話を始める。アダムも冬のむきだしの自然の美しさに子ども心に魅了された話で応じるが、エステルは退屈し、去っていく。やってきた庭師ジョン・ジェームズとアダムは世間話をする。庭師は結婚37年になるが、男なんて自制心のかけらもない情欲の虜、と言い張る女性に、俺は床を共にしても指一本触れない、と賭に応じ、負けてしまって結婚したのがいまの女房だ、まんまとはめられちゃったのかな、と語って去っていく。

**第3幕。**数日後の同じ居間。土曜日の午前。杯を傾けるエドワードは、エステルの読んでいる朝刊を借りたがるが、一部分も貸さない。彼女は死亡記事欄に自分より年下の者を見つけることが満足だと語る。すぐ身近のドアを閉めさせるためだけに、わざわざ家政婦ケイトを呼び鈴で二階から呼びつける嫌がらせを行い、召使階級が昨今はのさばっている、と嘆く。そこへファニーが入室。二階での

ケイトの作業がアダムの主人部屋とエスターの部屋との交換で、アダムがエスターの要請を了解したと知るや、屋敷の管理運営責任は自分にあるとして、調度品を元通りに戻すようにケイトに指示する。そしてこれ以上二人を屋敷に住まわせる義務はアダムにはなく、荷物をまとめて退去するよう、エドワードに命じる。アダム自身がそこへ現れ、一定額の支度金を与えることを条件に彼も退去を促すので、エドワードは観念して荷造りに向かう。さらにエスターに対してもファニーは大学街のマロウン・ロードにある借家の賃貸契約の手配を済ませ、今晚中の引越しを迫ると、さすがのエスターも愕然として涙にくれながら、退出する。こうした強硬姿勢で臨んだことにアダムは一抹の後悔を示すが、ファニーは自己責任を主張する。アダムは人間の自由意思と潜在能力を強調するアルスター出身の修道士ペラギウス (Pelagius [360?-420]) が聖アウグスチヌスとの神学論争に勝利していれば世界はもっと幸福になっていただろうに、と自らの宗教観を展開するが、ファニーには通じない。それどころか、第2幕で見たように、このまま自分とアダムが同居することは世間体を考えれば許されず、むしろ自分とアダムが結婚するほうが良いし、よき妻になる自信もある、とアダムに迫る。愛情に基づかない、打算だけの結婚を批判するアダムに、愛ゆえの結婚でも挫折する、とファニーは譲らない。しかしアダムは、人生を賭けるだけの激情を抱ける女性としか自分は結婚しない、と彼女の求婚を拒絶する。折あしく、息子アーサーが登場し、ファニーは説得を諦めて立ち去る。場違いな神学論争を挑むアーサーを無視して、アダムも立ち去り、ジェニーを呼ぶようにケイトに命じる。入れ替わりにドリーンが登場。アダムが自分と結婚する意思はないだろうと思うこと、ロンドンに出て自活する計画を、兄やまもなく戻ってきた母ファニーに語るが、親からの仕送りを期待する生半可な決意であることを見抜かれる。愚痴をこぼしながらも荷造りを終えたエドワードやエスター、ファニー一家、そして緊急に呼び出されたジェニーを前に、アダムは遺産相続をめぐる最終決断を告げる。それは亡きレパー卿が当然なすべきだった行為、すなわち、子と認知したジェニーに全財産を贈与するという決断であり、ジェニーこそが、故人が望んだ巨額財産の用途を弁えているからだ、と語る。ジェニーはこの申し出を受け入れ、エドワードやエスター、ファニー一家にも生活費と若干の手当ての支給を約束する。彼らはそれぞれにある程度、納得して立ち去る。ジェニーはこの屋敷を建て替えると言い、アダムに求愛する。遺言朗読のときに初めて会った時から一目惚れしていたこと、著述以外に能のないと謙遜するアダムはこれまで通りの地味な仕事を続ければよく、面倒な財産管理はすべて自分が引き受けるから、と口説くジェニーにアダムはキスを与える。

遺産相続をめぐる骨肉の争いが大団円の結末を迎える話である。血縁の深さから言えば、妹エスターが2親等、姪ファニーと甥エドワードが3親等、又従兄弟のアダムは5親等に当たり、非嫡子とはいえ娘ジェニーが直系1親等でもっともレパー卿に近い間柄に違いなく、アダムの下した最終判断は、法律の規定にも適うものであろう。

(1940年代の北アイルランドでの民法規定について筆者は不案内だが、アダムは法律上の「遺贈の放棄」をしたわけではなく、受遺したうえでジェニーに贈与する形式になっている。)

遺産相続にまつわる悲喜劇は、ボイル (William Boyle, 1853-1923) の『建設資金』 (*The Building Fund*, 1905) やオケイシー (Sean O'Casey, 1880-1964) の『ジュノーと孔雀』 (*Juno and the Paycock*, 1924) が先鞭をつけている主題だが、遺言に

瑕疵があつて手に入らない『ジュノーと孔雀』のどんでん返しほどではないにしても、予想外の人物に遺贈が指定されるプロットの面白さや、遺産を狙って自分の娘をけしかけたり、果ては自分から求婚する未亡人ファニーの凄まじい執念も見応えがある。寄生虫のように他人の財力に頼りきって生きてきたエステーやエドワードの醜態は、自業自得とはいいいながら、結末には哀れも感じさせる。

著者アーヴィン57歳のときの初演である本作品では、クィーンズ大学から名誉文学博士号を授与されている共通点をもつ、主人公アダムに著者のモデルを読み込むことが出来ようが、子宝に恵まれぬまま、81歳で妻に先立たれて晩年6年間を孤独に施設で過ごしたアーヴィンの経歴は、恐ろしいまでにレパー卿の辿った運命に酷似している。アーヴィンが死後、財産を遺贈したか否か、あるいは遺産が本作品のように巨額であったかどうかは不詳だが。

なお、プロテスタントの長老派 (Presbyterians) のレパー卿の葬儀に、地区の名士とあつて、市長のほかに、カトリックの司教 (Bishop) や司教地方代理 (Dean) も会葬に列席したが、アダムは「死には宗派の違いはない」(There are no sectarian differences in death. [301]) と応じている。ユニオニストに転向したアーヴィンが語らせる台詞としては極めて公平で、偏向のない宗教観と言えよう。

##### ⑤『私企業』(テキスト未見) 1947年

筋らしい筋の展開はなく、登場人物たちが男女の権利、労使の権利、権力と正義などの現実の諸問題について論争する劇。標題にとられた企業の労働組合には、大衆支配が個人を押しつぶす現象がみられるため、ピーター・ローガン (Peter Logan) は、あえて労組に参加しなかった良心的労働者である。しかし、雇用者の事業が壊滅状態に陥り、彼も労組入りせざるを得なくなると、労組はこのはみ出し者を受け入れるわけにはいかない。民主的権利を求めて必死になって闘う労組が、その母体では民主主義を破壊している。労組は外では民主主義を唱えながら、内では独裁主義を実践しており、自らの利益追及のために日和見主義者たちが行う不安定なゲームが彼らの政略である。

エドモンド・デラウェア (Edmund De-la-Ware) という登場人物は、「英国議会は、口達者な愚か者ともったいぶった気取り屋で構成され、ときたまひとりの天才がそのなかに放り込まれて、われわれの自尊心を救ってくれる」と語り、理想主義者たちの心のなかには実はヒトラー (のような独裁者) が隠れていて、彼らは抽象的な人間全般を称えるあまり、個別・具体的な人間を見ると癩癩を起こすけれども、一方、人間の進歩・改良などにはあまり希望を抱かない悲観主義者の自分は、人間は思ったより

もすぐれているもんだ、といつも驚かされる、などと述べる。デンジル(Denzil)という男も同様に、高潔な人物は残忍な人物にもなりえるし、道徳家が信念をかけて闘うよりも、下劣なごろつきが遊び心で闘う方が安心できる、と語っている。ショーが自作戯曲に論文を補足に付け加えるような形で思想を提示するのではなく、それぞれに自己主張する登場人物たちの背後に、著者アーヴィンが黒子で潜んでいるようだ。

上記のような記述から、この『私企業』は、おそらく『船』『ロバートの妻』などにみられた、思想劇、観念劇の傾向の強い作品であろうと推測される。

#### ⑥『クリスティ家の人々』(テキスト未読了) 3幕(全6場)

1947年10月13日、グラスゴウの市民劇場(Citizens' Theatre)——収容規模793席——にてキャソン(John Casson)演出で初演され、改訂版は1948年3月26日、ベルファーストのグループ・シアター(Group Theatre)——収容規模240席——でゴウルドブラット(Harold Goldblatt)が演出およびジェイムズ役で出演して初演された。

第1幕1場はうすら寒い9月のある日の午前、小さな田舎ホテル〈バットとボール〉の個室。詐欺罪で懲役10年に服した55歳のジェイムズ(James Christie)は昨日釈放されたばかりで、新聞記者や事件の関係者との接触を避けるために自宅には戻らず、ほとぼりがさめるまで、40歳の妻ソフィア(Sophia Christie)とこのホテルに偽名コウルター(Coulter)で宿泊している。10年の牢獄生活はジェイムズの心身を大きく変え、写真入りで掲載された新聞報道を見た客室係のメイドも、老け込んだ彼が当人であるとは気づかない(ようだ)が、宿泊客の中には記事を見て、終身刑か死刑が相当だ、と怒る者もあり、事件はまだ風化していない。扉が開くと起立して迎える囚人規律がジェイムズの身には染み込んでおり、扉や窓を自分で開けるのも10年ぶりなら、10年ぶりに乗った自動車の速度に不安になったりし、自由・解放を唐突に与えられた奴隷心理がよく分かる、刑務所暮らしは規則正しい食事や運動などの日課、ときには講話や演劇などの余興もあって案外楽しい、と世間の人が思っているのなら、みんなに禁固6か月を命じればいい、話し相手は10年一日同じ顔ぶれの連中で、監守には命令ばかりされる、と語る。夫の収監後、財産はすべて没収され、二人の子ども——デイヴィッド(David)とジュリア(Julia)——と姑を支えてきた苦勞を妻が訴えると、涙脆くなったジェイムズは嗚咽を禁じ得ない。家事や料理の上手なソフィアは、夫の債権者の一人アレン(John Allen)からホテル経営を任せられ、いまでは5つのホテルを管理して、かなりの収入をあげているが、詐欺罪の前科を持つ夫を事業に参加させることはもちろん、ホテルの評判を台無しにするとして、夫との関連を世間に知られることも恐れている。アンドウヴァー(Andover)と名乗る地元新聞記者の面会希望をメイドが告げる。拒否にも関わらず個室に入ってきた彼は、刑務所生活と今後の進路に関するジェイムズの独占インタビューの特ダネと引き換えに、多額の謝礼を約束する。金に困っているジェイムズは渡りに船と了承し、逮捕や量刑がいかに不当なものであったか、話し始める。ソフィアは部屋を出ていく。

以下、2場は同日の夕方のテムズ・ヴァリー(Thames Valley)のクリスティの自



宅の居間、第2幕1場は3か月後のバーリントン・ホテル (Burlington Hotel) のオフィス、2場は同日夕方のクリスティの自宅の居間、第3幕はおなじくクリスティの自宅の居間で、1場が1か月後の土曜の午後、2場がさらに2か月後、と指示されている。残念ながらテキストの到着がこの拙論提出締切りの2日前だったため、第1幕2場以降の展開については稿を改めたい。

研究書によれば、この作品は刑務所出所後の人生がいかに困難かを描いている。その点では、独居房に監禁された主人公フォルダー (Falder) の自殺までの顛末を描いたゴールズワージー (John Galsworthy, 1867-1933) の社会劇の『正義』 (*Justice*, 1910) を連想させる主題であろう。主人公のジェイムズが刑期を終えて社会に戻ると、妻ソフィアはアレンという男と不倫関係にあり、彼は絶望のあまり、最後にはインドで新しい人生を賭ける決意を固める。この世の中は、善良そうにみえる人物が、良心の呵責もなしに不正行為を働き、ばれなければ犯罪も犯罪ではない、と嘯いている。かつて罪を犯したジェイムズも、道徳的な意味では自分は犯罪者ではない、と言う。なぜなら、画家が絵具を操り、兵士が部下を指揮するのと同じように、自分も金を扱っただけで、画家が絵具を塗り間違えたからといって、だれも画家を投獄したりしないように、自分の金銭上の過ちも本来なら犯罪に値しない、という詭弁である。これに対して、母親の老クリスティー夫人はもっと厳格で、罪人ではなく罪そのものを彼女は憎み、たとえ自分の息子の罪でさえも容赦しない。財政に長けた人々の巧みな駆け引きが描かれるこの作品のなかで、罪を憎むクリスティー夫人の個性は際立っている。彼女に言わせれば、アイルランド人には良心のかけらもない、という考えは誤りで、それはアイルランド支配の継続と保身のためにイングランド人が広めた神話にすぎない、と喝破する。(この記述およびクリスティという姓から推測して、主人公はアイルランド系かも知れない。)

#### ⑦『わが兄トム』 (*My Brother Tom*) 3幕 (全4場)

1952年3月26日、ベルファーストのグループ・シアターで初演。献辞はアーヴィンの従姉弟メイ・グリア (May Greer) とウィリー・グリア (Willie Greer) に捧げられている。『ボイドの店』の続編とでも呼ぶべき内容で、古き良きアルスターの人情がふたたび主題にとられている。

第1幕。北アイルランド、ダウン州 (County Down) のドナリア (Donaghreagh) にあるトム・ルーク (Tom Luke) の居間。両大戦間期の土曜日の午後3時ごろ。トムの妹で未亡人のライラ (Lila Kernaghan) が賛美歌を口ずさみながらアイロンがけをしていると、近所に住む、ほぼ同い年の未婚

女性ティーシー (Teeshie McBratney) が訪ねてきて、ジョー (Joe Luke) の帰宅は本当か、と尋ねる。ジョーは20年(と3か月10日)前、多額の負債を残して失踪したにも関わらず、昨夜なにげない風に舞い戻ってきたのだという。その借金は兄のトムが長年かけてひとりで返済を終えている。旧友との再会に出てジョーはあいにく留守で、彼に気があるティーシーは彼が結婚しているかどうか、知りたがる。シルクハットを被る立派な男に嫁ぐように父親から言われていた彼女は、ベルファーストでそういう男と出会ったものの、「コーラはめっちゃ高いねえ」などと野暮な話ばかりする男に幻滅して以来、婚期を逸している。店から60歳のトムが登場。弟ジョーの帰還を心底喜び、彼が戻るまで待つようにティーシーに勧める。トムの73歳の叔父(母方の末弟)ジェイムズ (James Luke) と71歳の叔母セイディ (Sadie Luke) 夫婦も登場。たえず体調の悪さをこぼし、ルーク一族より高貴な血統の出自を自慢する横柄な叔母や、びた一文金を出さない吝嗇の叔父は、トムやライラにとって余り会いたくはない親戚だが、「放蕩息子」の甥が戻ってきたとあれば是非迎えにいく、という叔母をむげに断ることもできない。ジョーが登場し、みなと再会の言葉を交わす。ティーシーが未婚なのを残念がり、叔母の長生きをおどけて祝い、大食漢<sup>27</sup>で有名だった叔父を称える。『創世記』のメトセラ (Methuselah) のように969歳まで長生きしたい、と叔父が返すと、そんなに長く老齢年金を払うのは大変、と叔母も応じる。ライラの20歳の一人娘メアリー (Mary Kernaghan) はベルファーストのクィーンズ大学の医学生で、その学費はトムが全面援助している。トムよりもっと裕福なのにけちな人がいる、とライラが当て擦ると、大都会に若い娘を一人暮らしさせるのはよくない、路面電車やトロリー・バスが狂った象のように突進する危険な街だと、二人は反論する。ジョーの失踪後、村には15軒の新築住宅が建ち、市役所には有料の男女公衆トイレも設置されて、これもけっこう収入源になる、とジェイムズは、あまり代わりばえのしない、村の変化を語る。ジョーは、アメリカ放浪中、カンザス・シティの公園に座っていると、故郷ドナリアの懐かしい光景——灯台や波止場、停泊船、海草やハリエニシダ (whin) の匂い、岩場で叫ぶ子どもたちの喚声——が蘇り、ホームシックになって帰国を決断したのだと語る。メアリーが帰省し、ジョーや叔母夫婦と挨拶、ジョーの歓迎パーティを提案して、トムは即座に賛成する。長老派教会のマーヴィン牧師 (Rev. Ernest Mervyn) やトムプソン医師 (Dr. George Thompson) も招くべきだとメアリーは提案するが、セイディ叔母は、(地獄の炎は象徴にすぎぬ、と唱える) 牧師や(見立ての甘い) 医者が出席すれば、祝宴というより検死審問みたいだ、と反対する。メアリーはさらにティーシーや、大学のボーイフレンドも招待したいと提案し、女が教育を受けると碌なことがない、とジェイムズはぼやく。トムと同年配の男、チェインバズ (Arthur Chambers) が、ジョーの帰還を聞きつけて訪ねてくる。彼はジョーの失踪時に貸していた35ポンドの金の返済を求めに来たのだが、ジョーが無一文だと知ると、20年待ったのだからいくらでも待てる、と猶予する。ジョーのその他の借金は兄トムが全額返済してくれていたことを初めて知ったジョーは、トムに詫げる。メアリーは小遣いの提供を、ティーシーはへそくりの拠出を申し出るが、チェインバズは他人の金は当てにせず、当事者のジョーに猶予期間を与えて立ち去る。借金だらけの「愚か者」(cod) ジョーには落胆した、と叔父夫婦は彼を見放し、歓迎パーティも辞退して、怒って退場。迷惑をかけ通しですまない、と謝るジョーに、この家がとどまるべき故郷だ、とトムは鼓舞し、女たちはお茶の準備を始める。

第2幕。同じ場所で、4日後。庭で鶏に餌をやるライラをトムが呼び寄せ、夫に捨てられ打ちひしがれたマーサ・マハフィ (Martha Mahaffy) があまりに気の毒でジョーの歓迎パーティに招待したこと、市役所職員から聞いた話では、ジョーがゴミ清掃員の仕事に申し込んだらしいことを伝える。自立の意気込みは買出し、〈職業に貴賤なし〉ではあるが、ルーク家の家名を考え、困惑する二人。そこへ当のジョーとメアリーが帰宅。メアリーは大学のボーイフレンドのチャーリー (Charlie

Montgomery) と真面目な交際を続けていて、彼氏は、バリーマギー (Ballymagee) の町でホテルを運営する親戚ケアングフ (Cairnduffs) 家に挨拶回りをしたあとで、我が家を訪ねて来る予定だ、と伝える。できれば歓迎パーティはそのホテルで、と提案するメアリーに、少人数の参加者や高い費用を理由にライラは反対するが、メアリーの発案ならば、トムは了承する。ジェイムズが烈火の如くに怒って飛び込む。彼は治安判事の現職にあり、かつては都市地区評議会 (Urban District Council) 議長職を3年間歴任し、州議会議員候補と目されたほど、ダウン州北部では名士として知られる自分の甥が、市の清掃業に就くのは恥辱である、と訴えるが、兄や叔父に経済的に迷惑をかけぬために定職に就きたいのだと、ジョーは反論。熟慮の結果なら仕方がない、と支持するトムを制して、自分の評判と関わりのないベルファーストやアメリカでならかまわないが、地元でそんな真似は許さない、市役所に圧力をかけてでも阻止する、とジェイムズも立場を譲らない。しかもジョーが就職相談に行った相手が、長年の政敵のマカリース市議 (Councillor John McAleese) と知るや、ますます激怒する。メアリーの恋人チャーリーが来訪。居合わせた家族と初対面の挨拶を交わす。清掃員に応募した話をジョーが持ち出すと、チャーリーは、世の中に必要な肉体労働を軽蔑してはならない、と答え、〈19世紀初頭の時点ではナポレオンとスティーブンソンのどちらが偉大な人物と思えただろうか〉と大学の初講義で訊かれた、教授の質問が強く印象に残り、後知恵のある現代なら自明の事柄でも、歴史のある時点では判断は困難なものだ、と語り、ほかに適職がないのならやむをえないのでは、とジョーに賛同する。チャーリーは、社会の進歩は一握りのエリートが担うのだ、と人間不平等の持説を展開し、一方、トムは正義や行動に関しては平等であらねばならないし、神を信じる、と答える。訪ねてきたティーシーにジェイムズは、ジョーの清掃員就労を翻意させるように仕向けるが、ジョーを「役立つごろつき寄生虫」(a good-for-nothin' scallywag an' sponger) 呼ばわりするのに堪忍袋の緒が切れたティーシーは、ジェイムズこそ世間の笑い者の無知なデブだと逆上、ジェイムズも「行かず後家」(oul' maid) と罵倒を返す、激しい口論になる。ティーシーを黙らせようとジョーは彼女の口を手で塞ぎ、ジェイムズが〈誰からも好かれたことのない女〉とティーシーを侮辱すると、自分は彼女が好きだった、と擁護する。そこへジョーの昔のごろつき仲間3人——親分格のピーター (Peter Connolly)、ウィリアム (William John Cobain)、ボブ (Bob Jefferson) ——が登場。かつてウィリアムは治安判事のジェイムズから懲役1か月を、ピーターは4か月家賃滞納による立退き処分を受けているやくざ者で、ジェイムズの言葉を借りれば、「人間のクズ」(rabble an' riff-raff) である。彼らは昔のよしみでタダ酒にありつこうと、ジョーを酒場に誘い、無理に連れ出そうとするので、トムは彼らに出て行くように厳しく迫る。昔付き合っていた悪友の対処に困惑するジョーは、ピーターに1ポンド紙幣を握らせ、腕をとって3人組を戸外へ連れ出す。厄介な連中と関わり合いになってこれから先が大変だ、となじるジェイムズに、ジョー本人も困惑顔 (he was put out) だったし、里帰りした者はひどい運命を時と共に忘れねばならない、とトムやチャーリーは庇い立てする。ジョーが戻り、悪友たちの訪問を詫げる。退去するチャーリーとメアリーにジェイムズが随行を申し出るのを、若い恋人たちの邪魔をするなんて気が利かない、とみなは咎める。絶望や失望ではなく希望に満ちあふれている若い頃に戻りたい、とティーシーが溜め息を漏らすと、経験不足で、能力以上の野心に動かされる青春時代は人生のなかで最悪の時期であり、自分は若い頃に戻りたくない、とジョーは答える。愛だのキスだのより生活資金が大事だと説くジェイムズに、金儲けは馬鹿でも出来るが、金をうまく使うのは賢者しか出来ない、とトムは皮肉り、ジェイムズは憤慨して退場。なおも若さに焦られるティーシーに、若い心を保つ秘訣は、自己愛ではなく、自分を犠牲にしても他人を愛することであり、それはいくつになっても可能だ、とトムは語る。

第3幕。数日後の夕方7時、ドナリアのケアングフズ・ホテル (Cairnduff's Hotel) のパーティ会

場の大広間。歓迎会を感謝するジョーに、気の毒な招待客のマハフィ夫人への配慮をトムは依頼する。中年の給仕頭アギー (Aggie) が宴の準備完了を伝え、かつてジョーとの交際経験があり、まだ独身の彼女は、幸福になるには勇気が必要、とかつての恋人ジョーに懐かしく接する。トムはなぜ自分が結婚しなかったのかをジョーに説明する。トムにはジェニーという恋人がいたが、この薄幸の娘は24歳の若さで、トムの腕に抱かれて病床で息を引き取ったこと、いまでもその面影が胸を去らない、と打ち明ける。チャーリーが一番に会場に到着し、清掃員の件をジョーに尋ねると、月曜日にまずジェームズの家のごみから回収予定だとジョーは答える。出席を拒否していたジェームズ夫婦も、お世辞とタダ飯の誘惑に負けて参加予定だ、とトム。次いで、マハフィ夫人が到着し、早く来すぎたのを詫げる。「汚水を飲み続けたような」第一印象を抱いたジョーだが、トムの指示通り、愛想よく応対する。夫人は夫に逃げられた話や、昨夜、丸暗記した6つのジョークを忘れたこと、自分があるとせつかくの宴が検死審問の雰囲気になって台無しになる、と立ち去ろうとするが、トムが押しとどめる。トムプソン医師とマーヴィン牧師が続いて到着。トムプソンは75歳で、すでに現役を退いているが、実直な人柄でいまだに患者たちの信望が厚く、もし我が家のごみ箱に死体を見つけても黙っていてくれ、とジョーに冗談を飛ばす。5年前にこの教区に着任したマーヴィンは50歳前で、職務に熱心だがユーモアも忘れない牧師である。手縫いのドレス姿でティーシーも登場。ジェームズとセイディは、宮中園遊会を思わせる、時代がかった華やかな盛装で登場。1892年にロンドンで開催されたアルスター代表者会議 (Ulster Convention) 以来、誰にも触らせたことのないシルク・ハットを自慢するジェームズに、ベルファーストの美術館に寄贈すべきですな、とトムはお世辞を言う。ホステス役のライラがまだ到着していないのを、昨今は礼儀がなくなっている、とセイディは批判し、ジョーとの宴席にすっかり上機嫌のティーシーに、年齢を弁えるように注意するが、ティーシーは若い頃の気分に浸っても害はない、と受け流す。給仕頭アギーの勧めのシェリー酒を牧師やティーシー、ジェームズは受けとる。(ジェームズは、このグラスを拵えたのは肺活量の少ない奴だ、と不平を漏らす。) 禁酒論者 (T.T.) だからといったん断ったセイディも、敵を知らねば、とシェリー酒を一気飲みし、さらにお代わりを要求する。トムプソン医師はマハフィ夫人にも気晴らしにと酒を勧め、たしかに最近はお墓参りも楽しくない、と夫人が言うと、かつてのように棺のあとを馬車の長い行列が続いた壮麗な葬儀が姿を消し、イングランドでは火葬に付してジャム瓶 (骨壺) に収めるような不敬な風潮がある、とセイディも嘆く。ようやく、ライラとメアリーが息を切らして到着。出がけに電話が鳴り、電話嫌いのライラが応答したものの、ジョーを呼び出すベルファーストから電話らしいが内容が聞き取れず、2度目に応じたメアリーは、声の主は女性で、ジョーはこのホテルのパーティーで留守だと伝えたところ、すぐ直行するとの返事だったと説明する。心当たりはない、と語るジョーに、また過去の悪事が露見するようね、とセイディは皮肉るが、最後の審判のときに神は寛大に処遇して下さる、と牧師がとりなす。トムはセイディを、ジョーはティーシーを、ジェームズはマハフィ夫人を (夫人はジェームズの帽子を預かると申し出るが、大事な帽子だからと彼は断る)、ライラは医師と牧師を、それぞれ食堂へと案内する。残ったチャーリーとメアリーはキスを交わしていちゃつくが、ライラの呼ぶ声に従って、食堂へ向かう。(第1場)

同じ大広間で、約30分後。客たちが賑やかに談笑し、動き回っている。やはり罪人のために地獄の炎は必要、とセイディが牧師に訴えると、それならセイディ専用の炎を作りましょう、と牧師は切り返す。椅子に置いていた帽子の上にマハフィ夫人が腰を降ろしたため、堅崩れして台無しになった、とジェームズは憤る。1892年、アルバート・ホールで英国首相のソールズベリー卿<sup>28)</sup> (Marquis of Salisbury) から買い上げを申し込まれたときにも、歴史は金では買えません、と固辞した由緒ある家宝への冒瀆だ、といつまでも嘆くジェームズに、最初は平謝りだったマハフィ夫人も次第に癪に障

りだす。セイディは、済んだことを嘆いても始まらない、新しい流行の帽子を買い直せばいい、とジェームズの帽子を放り投げる。お茶とワインの両方を頼んだ後、セイディはジョーに呼ばれて、若いうちの結婚に慎重姿勢のチャーリーとメアリーを鼓舞するように依頼されるが、必ず女が後悔するから結婚には反対、子どもを産んだ女性は罰金50ポンド、産ませた男性は投獄にすべき、自分が結婚したのはしつこく求婚されたから、と弁じ、夫ジェームズはセイディの方こそ待ち伏せストーカーまが이었다、と反論する。しかし、もう一度結婚するとしたらいまの相手を選びますか、とのメアリーの問いには、二人とも肯定で答え、手をつなぐ。厚い皮で覆われた、安全第一主義のマンモスが絶滅したように、むしろ若さ故の無知で怖いもの知らずの冒険心で結婚に早く踏み切ることをジョーは勧める。甘い紅茶を飲んだあとのワインがいつそう美味しい、と語るセイディを医者は冷やかす。所用で遅れてパーティにやってきたチェーンバーズは、35ポンドの領収書が入った封筒をジョーに差し出す。実は今朝、トムがその借金を返済したので、債務終了だと告げる。トムプソン医師が乾杯の祝辞——まず、生れ故郷で誰からも愛され尊敬される「たいした人物」(a dacent [sic] man) であるとトムを賞賛し、その弟であるからジョーも信用できること、仕事は何であるかよりも仕事をどうこなすかが大事であり、道路清掃を終えたら彼は市議会をクリーンにし、宇宙をクリーンにすることも出来るだろう、とジョーの再出発を祈念する——を述べ、歌や万歳三唱が続いたあと、ジョーが答辞を述べる。家族や親友を疎んじてこの土地を捨て、音沙汰なしだった自分は、聖書の〈放蕩息子〉そのものだった、それにも関わらず兄のトムは借金を返済してくれ、今朝も最後の35ポンドを支払ってくれながら、おくびにも出さず、暖かく迎え入れてくれた、この世の中でなりたいたものはわが兄トムの弟であることだ、と感謝する。そこへドアが開いて、アメリカ人女性マミー(Mamie)——ライラより2、3歳若い——が登場。彼女は2週間前までいた中国からジョーを追ってこの田舎町(one-horse town)にやってきたこと、アイルランドの電話通信事情は有史前、大洪水前だとまくしたてたあと、自分はジョーの妻だと告げて一同を驚かせる。国際情勢に関心を寄せるマミーは、人類の再生を目標にさまざまな協会に参加して慈善活動を展開し、このたびは中国人(the Chinks; 時代の制約から差別語が用いられている)の救援・向上のために訪中していたのだが、夫や家庭を顧みず各地を転々とする姿勢にジョーはうんざりして、ひさしぶりに故郷に戻る気を起こし、一文無しのふりをして人々の様子を窺ったのだ、という。ジョーの家族との紹介を終えて、清掃業を始める、というジョーの言葉にミニーは笑い出し、実はジョーは、カンザス・シティ、あるいはカンザス州で一番の金持ちだと一同に知らせる。ジョーが成功者と聞くやジェームズは態度を一変させて彼を自慢し、ジョーが妻帯者と知ったティーシーは悄然となる。しばらくは生れ故郷にとどまる意思をジョーは表明し、一文無しを偽装したことを深く詫びるとともに、貧富に関わらず歓待してくれたトムたちに感謝する。世の中がトムのような人間ばかりならマミーが世界中を救援活動に飛び回ることもない、この事件は村の語り草になるだろう、とトムプソン医師も語り、散会となる。ジョーとマミーはティーシーとこれから友人関係を続けることを確認し、トムはどんな形にせよ、弟の帰還を喜ぶ。客たちがいなくなったあと、会場の片付けを始めたアギーは、ジェームズの崩れた帽子を見つけて放り投げ、ゴミ箱に捨てるよう命じる。まったくゴミばかり、と呟きながら。

アーヴィンの最後の戯曲と思われるこの作品は、限りなく楽天的な性善説に満ちている。酒浸りのやくざ3人組を除けば、吝嗇で尊大な叔父夫婦でさえも憎めない人物として描かれ、トムをはじめ、ライラ、メアリーといった登場人物たちは、寛大で純朴な善人として揺るぎない強さを示す。彼らの純粹さのまえには、ジョーの帰還の動

機がひどく不純なものに思えるほどである。ジョーがどのようにしてカンザス・シティ一番の富豪になったかについては、経緯がまったく触れられておらず、また蓋然性・信憑性も低い。大富豪の彼が清掃業の肉体労働を目指す主題は、中期の1幕物『彼女はまったく淑女でなかった』のマギー・ピクルス夫人を想起させる。また、ペしゃんこになったジェイムズのシルクハットは、初期の1幕物『オレンジマン』のジョンの破れ太鼓と同様に、時代遅れの権威を象徴し、劇中でトムが示唆するように、美術館に展示すべき過去の歴史的遺物として残すか、あるいは劇末のアギーが実行するように、思い切って廃棄処分すべき無用の長物であると、著者は主張しているように思われる。また、戯曲全体として見れば、これは成功したアイルランド移民が故郷に錦を飾る、伝統的な里帰り物語と見なせるだろう。

「放蕩息子」を迎えるのは聖書では父親で、兄は弟の帰宅を嫉妬まじりに眺めるのだが、この作品では兄トムが聖書の父親代わりに寛大にふるまう。カインとアベルに溯る兄弟の不和は最初から解消され、父親の慈悲や意思を体現した人物としてトムが造型されていることに注目したい。初演時に68歳だったアーヴィンの理想の人間像は、聖書の故事を越えるほど寛容なトムだったのかも知れない。

#### (IV) さいごに

こんにち顧みられることの稀有なアーヴィンの戯曲の大部分を紹介してきたが、その作品に頻出する主題は、①世代間の価値観の対立、②男女間の主義・主張の相違、③個人と社会の葛藤、④宗派間の抗争、などであった。とくに①の主題については、若者とその両親や祖父・祖母世代との対立が、妥協の余地のないほど深い断絶や亀裂を生じている場合が多く、作者の辛辣な社会観・世代観を反映している印象を与える。

『戯曲作法』のなかでアーヴィン自身書いているように、彼の台詞は、日常会話で実際に話されているとはとうてい思われぬシング (John Millington Synge, 1871-1909) の装飾文体でもなければ、文法構造や発音が不明瞭ななまの会話を録音テープからそのまま起こして模写した文体でもなく、平明であるにも関わらず、陰影や含蓄に富んでいる。現代人の感覚からするとややプロットの説明が丁寧すぎたり、展開が緩慢に感じられる箇所もあるが、細部に様々な伏線を張り巡らせた緊密な構成と、平凡ながらも奥深い世間知に富む台詞によって、現在でも十二分に通用する魅力を放っている。一見、古臭い状況や主題を持ちながら、新鮮な発見の喜びを与えてくれるのは、アーヴィン戯曲が普遍的な人間の問題を掘り下げているからに他ならない。

本稿は、平成13～14年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))による研究成果報告書(課題番号13610599)の一部である。

注

- 1) ジョン・アーヴィン(菅原卓訳)『戯曲作法』(未来社, 1955/64年), pp.146-147. 原著St John Ervine, *How to Write a Play* (London: George Allen & Unwin, 1928/9) ではpp.118-9.
- 2) カナダ生れの英国の船主キュナード(Sir Samuel Cunard, 1787-1865)が1839年に設立したキュナード汽船会社(Cunard Line)の船舶。この会社はQueen Elizabeth II号などを運行している。
- 3) N. Sahal, *Sixty Years of Realistic Irish Drama* (Bombay: Macmillan and Co., 1971), p.81.
- 4) 元歌は次の通り——Mary, Mary, quite contrary,/How does your garden grow?/With silver bells and cockle shells,/And pretty maids in a row./And pretty maids in a row./——安藤幸江(編注)『Nursery Rhymes ビデオで楽しむマザーグース』(北星堂, 1997年), p.3.
- 5) Knight Commander (of the Order) of St. Michael and St. Georgeの略称。
- 6) エジプト南部のアスワン(Aswan)からスーダン北部カルトゥーム(Khartoum)にいたる, ナイル川流域の砂漠地方。
- 7) マン島は英国の王冠に忠誠を誓う保護領(dependency)であり, 英国領には含めない。*The Encyclopedia of Britain* (Oxford: Helicon, 1999), p.574.
- 8) スー(Sioux)族のインディアンの指導者で, 1876年モンタナ州のリトル・ビッグホーン川(Little Bighorn)の戦いを指揮し, カスター将軍(George Armstrong Custer, 1839-76)率いる第7騎兵隊を全滅させた人物(1831?-90)。
- 9) シャンペンなどの酒類を表す表現。別名, gigling water。刺激物の摂取を控えてコーヒーも遠慮するほど敬虔なミムズは, 酒の表現には疎いらしく, 自分には笑われるような点はない(There's nothing laughable about me.)と答えている(32)。
- 10) 1910年, 軍人のペイドゥン=ポウエル卿(Lord Robert Stephenson Smyth Baden-Powell, 1857-1941)と姉のLady Agnes Baden-Powellによって英国で創設された少女団であるガール・ガイドは7歳半から21歳の団員で構成され, ブラウニーズ(Brownies)は7歳半から11歳, ガイズ(Guides)は11歳から16歳, レインジャーズ(Rangers)は14歳から19歳, 指導部候補生からなるカデット(Cadet)は16歳から20歳という年齢枠がある。従って日本式に言えばブラウニーズは小学生主体(小学2-5年生)の組織である。ブラウニーは, スコットランド伝承では, 夜間に現れて密かに農家の手回り仕事をしてくれる小妖精の名称でもあり, ウェストレイク夫人は最初, この意味で理解して, 「顎鬚を生やし, 毒茸に座ってミルクを酸っぱくさせる, おかしな小さな生き物」(32)を思い浮かべたと語る。
- 11) ここでは改訂版の粗筋を記したが, 初版と改訂版には2割ほどの大幅な差異があり, この点の分析は次の論文に詳しい。廣田典夫「<sup>(ママ)</sup>セン・ジョン・アーヴィンの『アンソニーとアナ』」, 『早稲田商学』第309号(1985年1月), pp.23-39.
- 12) Sean McCann (ed.), *The Story of the Abbey Theatre* (London: Four Square Book, 1967), p.78.
- 13) 1856年にフランス東部の町ヴィッテルで発見された鉱泉を利用して, Société des Eaux de Vittelが市場化した, フランス初の無炭酸ミネラル・ウォーター。腎臓病, 肝臓病, 関節炎に効能があるとされ, 英国では1909年に商標登録された。
- 14) 1幕が水曜の午前, 2幕と3幕が日曜の午後であるから, 厳密には4日経過しているはずであるが, 3日前という内容の台詞をアナは2度発している(p.41, 53)。初版では1幕が木曜日の設定であり, アーヴィ

- ンが統一を図るのを見落とししたのかも知れない。
- 15) 教会での挙式に先立ち、連続3回日曜日に行い、異議の有無を問う。
  - 16) 英訳では“the god from the machine”，すなわち「機械から出てきた神」で、機械とは神の役俳優を吊していたクレーンを指す。Phyllis Hartnoll, *The Concise Oxford Companion to the Theatre* (Oxford: Oxford University Press, 1983/6), p.135.
  - 17) たとえば1幕で「最高の作家たちはみな、少なくとも癲癇持ちなのにあなたはなんにも患っていないみたい」と言うアナに、「不治の病にかかるべきだとは思いますが、おかしいくらいずっと元気なんですよ」(25)と応じるくだりは、癲癇は不治ではないし、その患者にとって不謹慎に響くであろう。あるいは、2幕で「アメリカにはむかし奴隷がいた」とのダンウッドディに、「たしかにいたが、間違った(皮膚の)色だった。封建制度の原材料は揃っている。何百万というユダヤ人やアイルランド人がアメリカにはおるのだから、封建制度の準備は大体できている」(38)という台詞は、黒人奴隷ならぬ白人奴隷としてユダヤ人やアイルランド人を社会の底辺に置くことを示唆する、極めて辛辣なレイシズムの台詞である。
  - 18) Knight (Commander of the Order) of the British Empireの略称。
  - 19) 「戯曲の方は英国及び紐育に買われたが、現在(一九二八年六月)のところ未だに上演を見ず、何時になつたら上演されるかの当ても附かない。」——『戯曲作法』, p.146.
  - 20) 単行本は1931年に、他の2小説との合本は1933年に出版されている。合本は、*The St. John Ervine Omnibus* (London: W. Collins Sons & Co., 1933)
  - 21) ニニアンという名前は、スコットランドに最初にキリスト教を伝道し、Whithorn (Wigtownshire)に397年に教会を開いた聖ニニアン(c.360-c.432)にちなむ。
  - 22) Alice, Alison, Elizabethなどのスコットランド系愛称。
  - 23) 幼児洗礼を受けた者が成人してその信仰を告白して教会員となる儀式。
  - 24) 『山陽新聞』, 2003年6月14日, p.6.
  - 25) レパーには「障害物競争馬」(steeplechaser)の意味が方言・俗語にある。
  - 26) 一般的綴りはMelchizedek, ドュエー聖書ではMelchisedech。サレム(現エルサレム)の王。アブラハムがケダラオメルに勝利したあと、1/10の戦利品を得た。パンとワインを持ち出した、最高神の祭司とされる。W.R.F.Browning, *A Dictionary of the Bible* (Oxford: Oxford University Press, 1996), p.248.
  - 27) まるで船も沈みかねないほどフォークに乗せても、フランス人綱渡り師ブロンダン(Charles Blondin, 1824-97)がナイアガラの滝の上に張られた綱上を(目隠しや竹馬で)渡ったように、なにひとつ落とさないうで無事に地獄の門のように大きく広げた口の中まで運んだ、とアイルランド人特有の誇張表現でジョーはおだてている(16)。
  - 28) 第3代ソールズベリー卿であるRobert Arthur Talbot Gascoyne-Cecil (1830-1903)は、英国の保守党の政治家で3期(1885-6, 1886-92, 1895-1902)にわたって首相を務めた。

#### テキスト

(アーヴィンの戯曲からの引用は、以下のテキストから拙訳で行い、末尾に頁数を付した。)

St. John G. Ervine, *The Ship: A Play in Three Acts* (London: George Allen & Unwin, 1922/25)

St. John G. Ervine, *Four One-Act Plays* (New York: The Macmillan Company, 1938)

St. John G. Ervine, *Anthony and Anna: A Comedy in Three Acts* (London: George Allen & Unwin, 1925/36)

St. John Ervine, *The First Mrs. Fraser* (London: Chatto & Windus, 1929)



- St. John Ervine, *Robert's Wife: A Comedy in Three Acts* (London: George Allen & Unwin, 1938)  
St. John Ervine, *Friends and Relations: A Comedy in Three Acts* (London: George Allen & Unwin, 1947)  
St. John Ervine, *The Christies: A Play in Three Acts* (London: George Allen & Unwin, 1949)  
St. John Ervine, *My Brother Tom: A Country Comedy in Three Acts* (London: George Allen & Unwin, 1952)  
*Selected Plays of St. John Ervine* (Gerrards Cross, Bucks. : Colin Smythe, 1988)

#### 参考文献

Barry Turner & Mary Fulton, *The Playgoer's Companion* (London: Virgin Books, 1983)

#### 付 記

前期作品を論じた21号の拙論の注7)に、『寛大な恋人』の最新の邦訳文献として以下の訳書を追加する。  
久保田重芳(訳)『アイルランド演劇選集』(青山社, 1994年) [『寛大な恋人』を所収; pp.187-208.]